

第1回“京都をつなぐ無形文化遺産”「地蔵盆」審査会次第

日 時：平成26年5月30日（金）

15：00～17：00

場 所：壬生寺 会議室

1 開会

2 挨拶

3 制度説明

“京都をつなぐ無形文化遺産”制度について

4 資料説明

- （1）地蔵盆について（歴史と民俗）
- （2）地蔵盆に関するアンケート調査の結果
- （3）山科の地蔵盆

5 議事

“京都をつなぐ無形文化遺産”「地蔵盆」の検討

6 閉会

【配布資料】

①次 第

②名 簿

③配席図

④資 料

資 料 1	“京都をつなぐ無形文化遺産”制度について
資 料 2	地蔵盆について（歴史と民俗）
資 料 3	地蔵盆に関するアンケート調査結果概要
資 料 4	山科の地蔵盆
資 料 5	山科の地蔵盆
資 料 6	“京都をつなぐ無形文化遺産”「地蔵盆」（選定イメージ）
参考資料1	地蔵盆の手帳
参考資料2	上京区成逸学区「地蔵盆」パンフレット
参考資料3	“京都をつなぐ無形文化遺産”「京の食文化」
参考資料4	“京都をつなぐ無形文化遺産”「京・花街の文化」

“京都をつなぐ無形文化遺産”「地藏盆」審査会委員名簿

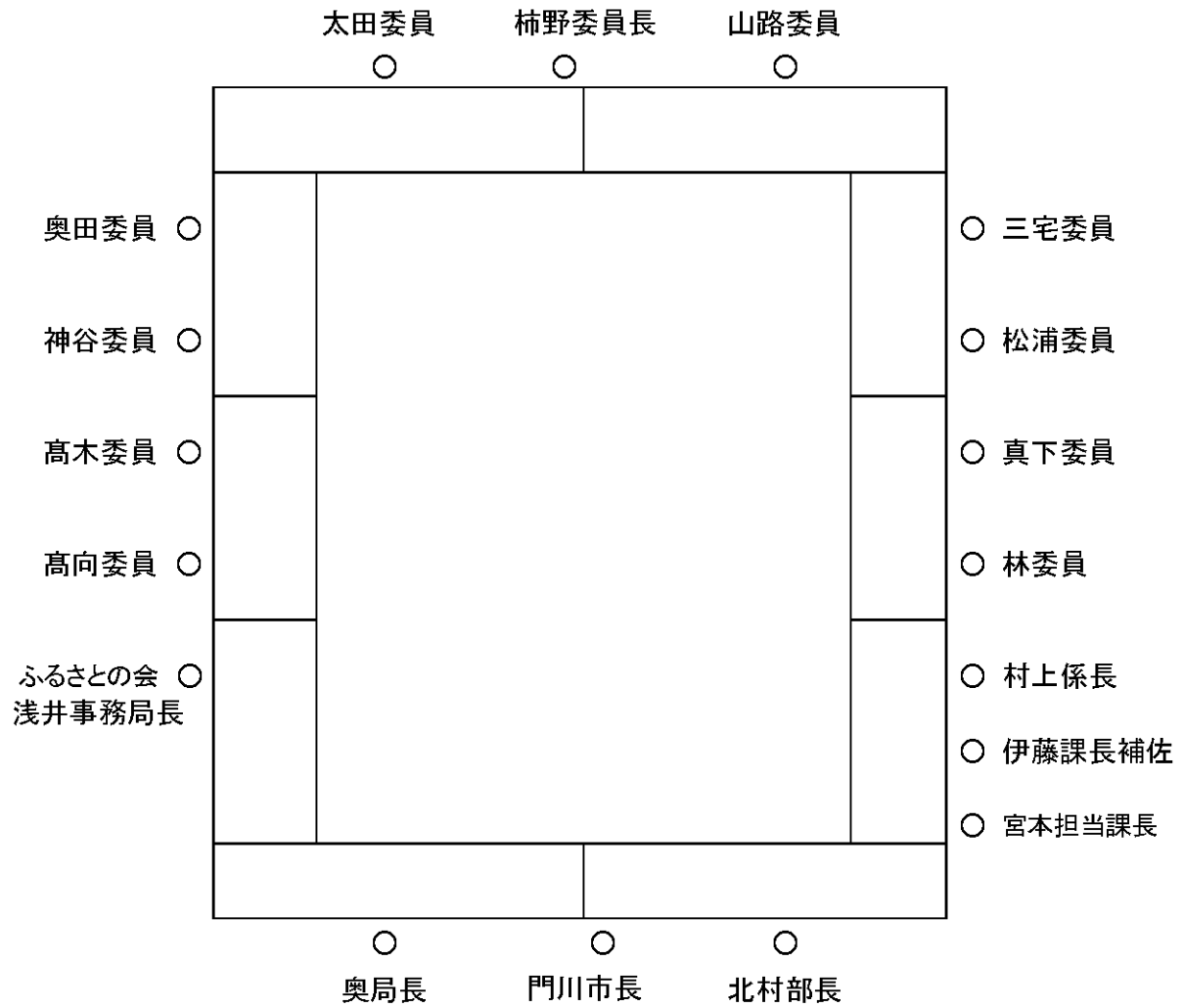
(委員長及び副委員長以外の委員は五十音順, 敬称略)

	氏 名	肩 書	出欠
委員長	柿野 欽吾	京都産業大学理事長	○
副委員長	熊倉 功夫	静岡文化芸術大学学長	
委員	太田 達	弘道館館主, 同志社大学文化情報学部特別講師	○
委員	奥田 末子	京都市地域女性会連合会常任委員	○
委員	神谷 潔	写真家	○
委員	高木 良枝	市民公募委員	○
委員	高向 正和	市民公募委員	○
委員	林 則子	市民公募委員	○
委員	真下 美弥子	京都精華大学非常勤講師	○
委員	松浦 俊海	壬生寺貫主	○
委員	三宅 宏美	市民公募委員	○
委員	宗田 好史	京都府立大学教授	
委員	山路 興造	京都市文化財保護審議会委員	○

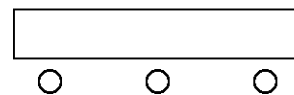
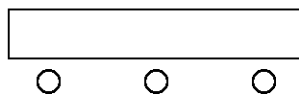
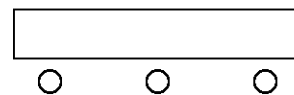
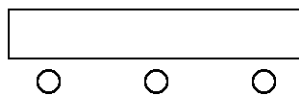
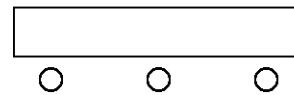
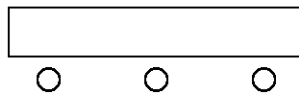
第1回“京都をつなぐ無形文化遺産”「地蔵盆」審査会配席図

日時:平成26年5月30日(金)15:00～17:00

場所:壬生寺 会議室



出入口



“京都をつなぐ無形文化遺産” 制度

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

平成26年5月

①制度の趣旨

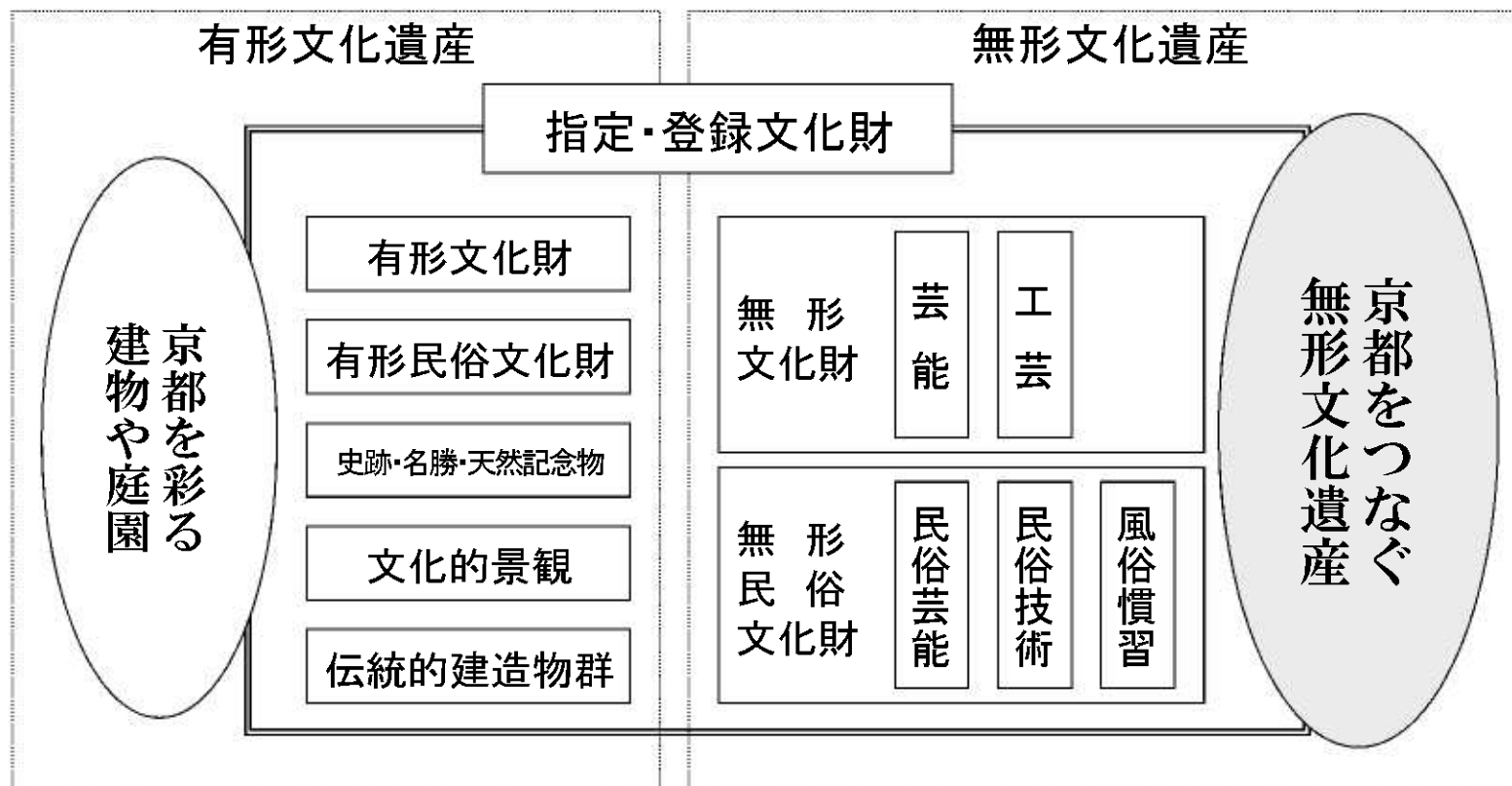
- ▶ 京都には、時代とともに変容しながらも、世代を越えて暮らしの中で伝えられてきた数多くの無形文化遺産があるが、その中には、定義や概念、保存団体が不明確であることから、現行の法令上、文化財としての指定・登録が困難なものもある。
- ▶ そこで、それらの価値を再発見、再認識し、内外に魅力を発信するとともに、大切に引き継いでいこうという市民的気運を盛り上げるため、文化芸術都市・京都として、今年度、無形文化遺産を守る独自の仕組み「“京都をつなぐ無形文化遺産”制度」を創設した。

コンセプト

- ・ 選定がゴールではなく、スタート
- ・ 柔軟で緩やか
- ・ 市民に支持される
- ・ 規制をかけるものでなく、皆に喜ばれる

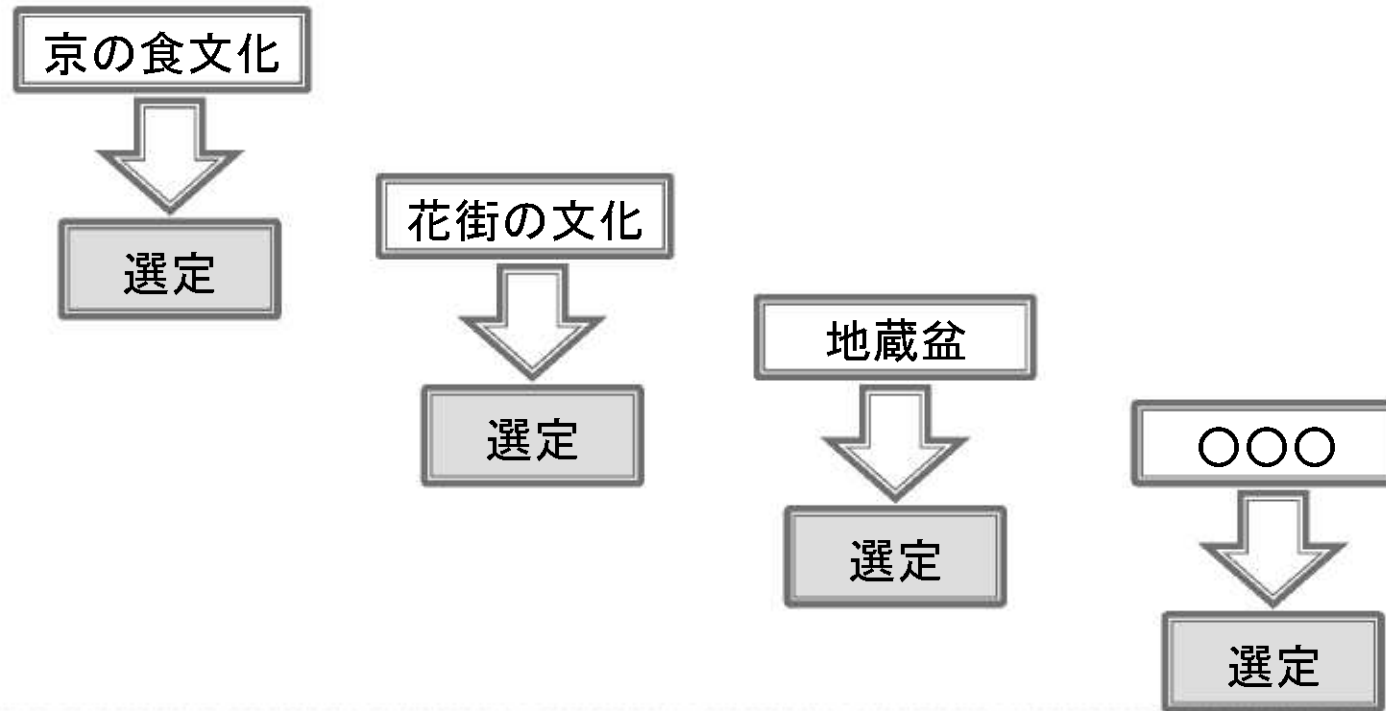
②制度の対象

京都において世代を越えて暮らしの中で継承されている無形の文化遺産を対象とし、有識者等で構成する審査会において選定する。



③審査会における審議方法について

まず、「京の食文化」をモデルケースとして取り組み、引き続き、「花街の文化」「地蔵盆」に取り組み、その成果を検証しつつ、その他の対象候補や抽出方法などについて議論を深め、制度を構築していく。

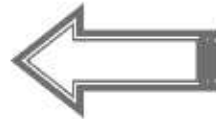


④ 「地蔵盆」 選定スケジュール

- ▶ 第1回審査会（平成26年5月30日）
選定方法等についての意見交換



- ▶ 第2回審査会（平成26年7月予定）
選定案についての意見交換



パブリック
コメント

- ▶ 第3回審査会（平成26年9月予定）
選定



普及啓発



地藏盆について（歴史・民俗）

1 京都の地藏盆の系譜

江戸前期には、すでに現在の地藏盆の系譜に連なると推測される地藏祭が存在している。⇒戦国期～江戸初期の絵画資料、文献資料には地藏の記載がない。

⇒なぜ江戸前期に、かくも広汎に誕生するのか。

⇒明治初期の廃仏毀釈による地藏撤去後の強い復原力は何か。（撤去の実効性？）

＊地藏盆という名称は、近代以降のもの。江戸以前は一般的には「地藏祭」と称した。

（参考）地藏信仰の歴史的展開

奈良時代：地藏經典（「十輪經」）が伝来。地藏造像例は少ない。＝地藏信仰の浸透度合いは低いといわれる。

平安後期：民間への仏教浸透と共に、地藏への信仰が高まる。貴族階級ではなく庶民に浸透した？例）「今昔物語」

鎌倉から室町前期：現世利益を伴った多様な地藏信仰が、庶民、武士階級に浸透。

「泥付地藏」「矢取地藏」「將軍地藏」等。

室町後期：死者の追善供養と十王信仰が結びつく。地藏は閻魔大王の本身で、地獄の鬼から亡者を救う慈悲の面が強調＝六道をめぐる人々を救う。⇔六地藏めぐり

江戸時代：延命地藏、腹帯地藏、子育地藏、油掛地藏等の現世利益的な身代わり地藏が多数創出。それとともに、地域毎に多数の地藏が祭祀＝地藏盆（祭）

c f. 明治 4 年 10 月 路傍の地藏や地藏堂の撤去命令

明治 5 年 木戸門の撤去命令

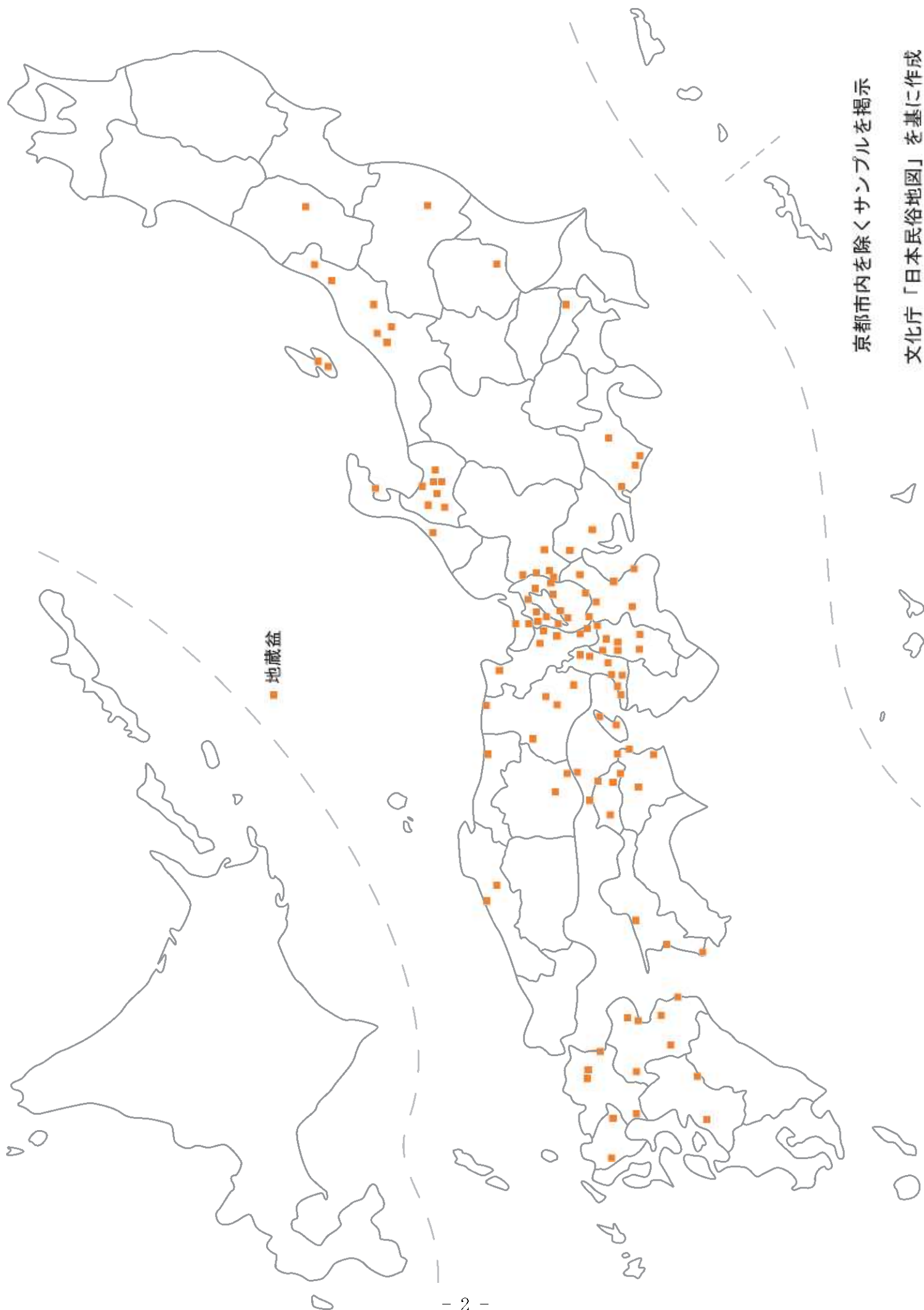
2 地藏盆の分布

- ・西日本中心に広範囲に分布。京都を中心に近畿地方に濃厚に分布。[参考図]

3 江戸時代の地藏盆の儀礼内容

- ・ふごおろし、お菓子配り等の記述はなし。
- ・その他の現在の地藏盆で行われる儀礼内容は、江戸時代の前半から広汎に確認できる。

[表]



京都市内を除くサンプルを揭示

文化庁「日本民俗地図」を基に作成

発行年	行事／期日 文献タイトル	僧侶の読経	ご詠歌・念仏	数珠回し	先祖供養	お地藏さんのお化粧	燈明（灯明）	供物	香華（香花）	地藏の移動	お菓子配り	福引	ふごおろし	盆踊り	一式飾り・ツクリモノ	辻・木戸脇	一町一組	子ども	七月廿二日	七月廿三日	七月廿四日
現在		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	×	○	○	○	○	○
1655以前	「反古集」															○	○	○			
1665	「京雀」第三						○	○		○											○
1674	「山城四季物語」					○		○	○							○		○			
1676	「日次紀事」			○					○	○								○			
1678	「京雀跡追」地						○	○													○
1680	「難波鑑」						○	○								○		○			○
1756	「在京日記」							○	○											○	○
1764	「拾椎雑話」					○	○	○	○									○		○	○
1780	「都名所圖會」																				○
1781	「見た京物語」															○					
1802	「羈旅漫録」						○		○	○					○		○				
1836	「筆満可勢」							○													
1836	「腹帯町文書」		○					○									○	○	○	○	○
1854	「若山要助日記」														○						

(参考史料)

『看聞御記』応永二十三年(一四一六)八月九日

聞く、今日桂地藏へ風流の拍物参る、室町殿并に武衛(勘解由小路)中間等寄り合い、田植の風情を作り、金欄曇子等裁着す、結構目を驚かすと云々、又、或る方より山臥峯入りの体を模して、負(笈)以下の道具共、唐物にて之を作る、希代の見物と云々、

鈴木正三『反古集』

京中辻々ノ地藏祭、去年七月ヨリ童部共、見事ニ致シ候、此五月ニモ盆ヲ待兼候テ辻々ニテ祭ヲ見事ニ致シ候

◎鈴木正三は明暦元年(一六五五)没

『山城四季物語』(延宝二年(一六七四))

童子の業として、道のはた辻々の石仏をとりあつめて、地藏と名付、顔白く色どり、花を手折、供物をささげて地藏祭をなすなり

『日次紀事』延宝四年(一六七六)

七月二十四日

洛下の童兒地藏祭り

洛下兒童各ノ香華ヲ於街衢之石地藏ニ供シテ而之ヲ祭ル、蓋道饗祭リ之遺風乎

姉小路地藏祭り

昨日ヨリ姉小路東洞院西地藏弥陀ノ画像を家店に安置ス、各百万遍ノ数珠ヲ轉ス、明日ニ及ブ、

『羈旅漫録』享和二年(一八〇二)

地藏まつり

七月廿二日より廿四日にいたり、京の町々地藏祭あり、一町一組家主年寄の家に幕を張り、地藏井を安置し、いろいろの備へ物をかざり、前には燈明挑灯を出し、家の前には手すりをつけ、佛像の前に通夜して酒もありあそべり、活花、花扇かけその外器物をあつめて種々の品をつくり、家毎に飾りをく町もあり、年中町内のいひ合せもこの日にするといふ、そのありさま江戸の天王まつりの假宮の如し、伏見邊大坂にいたりてまたこれにおなじ、

『志水町文書』明治四年(一八七二)十月四日

一、市中町々に地藏堂有之、毎年七月廿四日地藏会致し来り候処、今般御停止ニ付、右地藏取払ニ相成候、当町内大嶋喜左衛門軒下ニ地藏堂、表口五尺奥行三尺之内ニ右地藏二体祭り有之処、此度小学校え差出し可申処、大嶋喜左衛門・志水清助兩人買主として大嶋喜左衛門之裏え入置申候、

但し、地藏堂老貫文、石仏二体式百五十文、小学校え差出し候、明治四年辛未十月四日

「地蔵盆」に関するアンケート調査

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
平成 26 年 5 月 30 日

調査の概要

- ・調査対象 自治会長・町内会長など
- ・調査方法 書面によるアンケート調査（郵送回収）
- ・調査対象数（配布数） 6,627 件
- ・調査期間 平成 25 年 9 月上旬～12 月末
- ・回収状況 有効回収数 3,684（有効回収率 55.6%）

- ・設問項目 問 1 回答団体の所在地等
 問 2 お地蔵さんの有無／箇所数と個体数
 問 3 平成 25 年度の地蔵盆実施の有無／開催日
 問 4 地蔵盆の場所／移動したかどうか
 問 5 地蔵盆の実施主体
 問 6 地蔵盆で行った行事

・回答団体の内訳（行政区別）

区分	回答団体数	回答全体に占める比率（%）
全体	3,684	100
北区	309	8.4
上京区	423	11.5
左京区	350	9.5
中京区	444	12.1
東山区	208	5.6
山科区	218	5.9
下京区	366	9.9
南区	214	5.8
右京区	349	9.5
西京区	159	4.3
伏見区	593	16.1
無回答	51	1.4

〈集計方法、数値の取り扱いについて〉

- 集計は百分率（%）によるものとし、集計結果は小数第2位を四捨五入し、小数第1位までを表記している。
- 単数回答（選択肢を1つだけ選ぶ）設問において、各選択肢の回答構成比の合計は、四捨五入の関係で100.0%にならない場合がある。
- 複数回答（該当する選択肢をすべて選ぶ）設問において、各選択肢の回答構成比の合計は、100.0%を超える場合がある。
- 行政区別比較においては、全体傾向と比較し、著しく差異のある場合（目安として10ポイント以上）について記載する。それ以外に言及する必要のあるものについては、「比較的」ないしは「やや」の文言を用いた。

調査の結果

お地蔵さんの有無

- ☞ 京都市内でお地蔵さんのある自治会・町内会は71.4%であり、その80.7%が「1か所」である。お地蔵さんの個体数は「1体」が62.7%であるが、「3体以上」も18.2%ある。
- ☞ お地蔵さんのある自治会・町内会が多いのは東山区（90.9%）と上京区（84.4%）であり、お地蔵さんのない自治会・町内会が多いのは西京区（54.1%）である。
- ☞ お地蔵さんの箇所数及び個体数が多いのは、左京区と東山区の自治会・町内会であり、1ヶ所1体が多いのは中京区である。

地蔵盆実施の有無

- ☞ 平成25年度に地蔵盆を行った自治会・町内会は78.8%あった。行わなかったのは20.3%である。
お地蔵さんがある自治会・町内会では、ほとんどが地蔵盆を行っている（94.3%）。また、お地蔵さんがなくて地蔵盆を行った自治会・町内会は、お地蔵さんがない地域全体の36.8%であった。
寺に預けたり別の場所に保管している80地域の中では、地蔵盆をしたところが87.5%、しなかったところが12.5%となっている。
- ☞ 行政区別に、地蔵盆を行ったどうかをみると、行った町内会・自治会の多いのは東山区（90.4%）、上京区（88.7%）であり、一方、行わなかったところが多いのは西京区（34.0%）、伏見区（32.2%）である。

地蔵盆の開催日

- ☞ 地蔵盆の開催は、盂蘭盆直後の日曜日である8月18日と、翌週の土日である24日・25日に集中している（約30%）。

地蔵盆の場所と実施主体

- ☞ 地蔵盆を行った場所は、「地蔵堂の前」が38.9%で、「個人宅」22.8%、「ガレージ等の空き地」17.0%、「集会所・公園等」12.0%、「道路上」10.6%である。
- ☞ 行政区別にみると、「地蔵堂の前」で行う自治会・町内会が多いのは東山区（55.9%）である。「個人宅」で行うところが多いのは上京区（36.6%）、中京区（34.7%）、下京区（32.2%）であり、とくに上京区と中京区は「地蔵堂の前」よりも多くなっている。
- ☞ 地蔵盆の実施主体は、「自治会・町内会」が83.7%を占める。

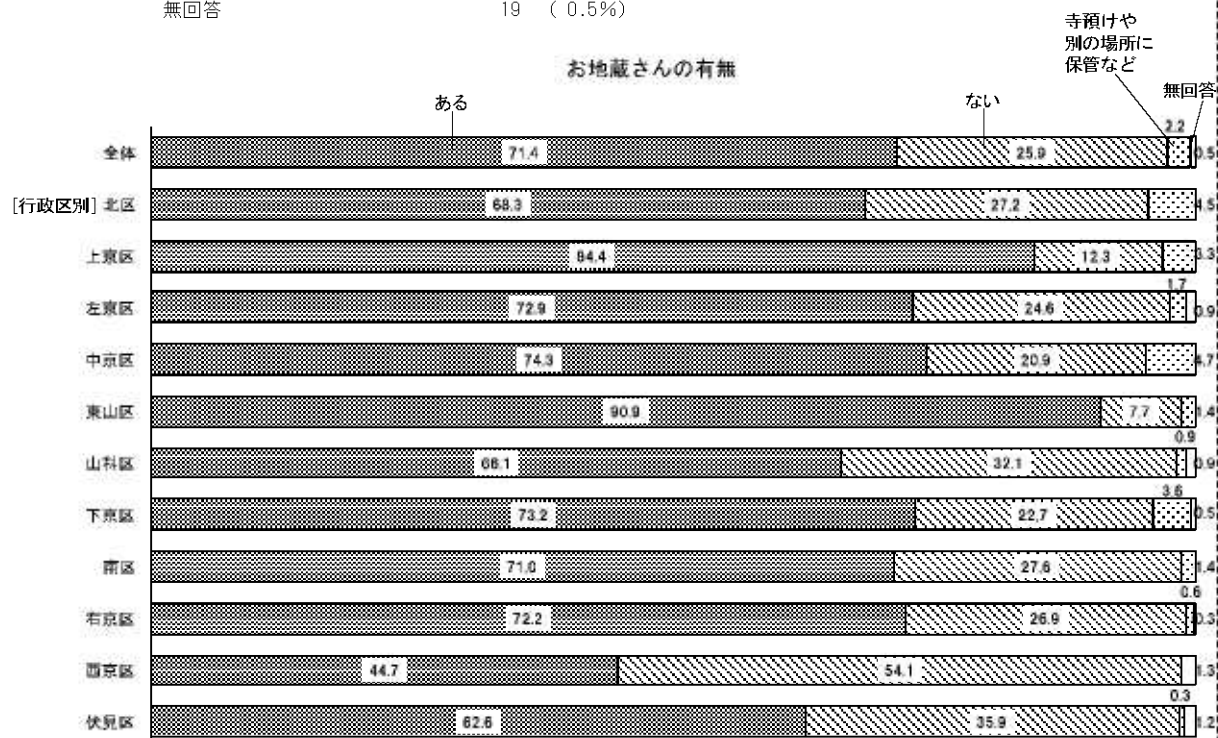
地蔵盆の行事

- ☞ 地蔵盆で行った行事は、最も多かったのが「お菓子配り」（90.5%）で、以下、「福引」67.5%、「一式飾り」59.4%、「僧侶の読経」52.1%、「数珠回し」42.5%、「お地蔵さんの化粧」36.6%となっている。

お地蔵さんの有無

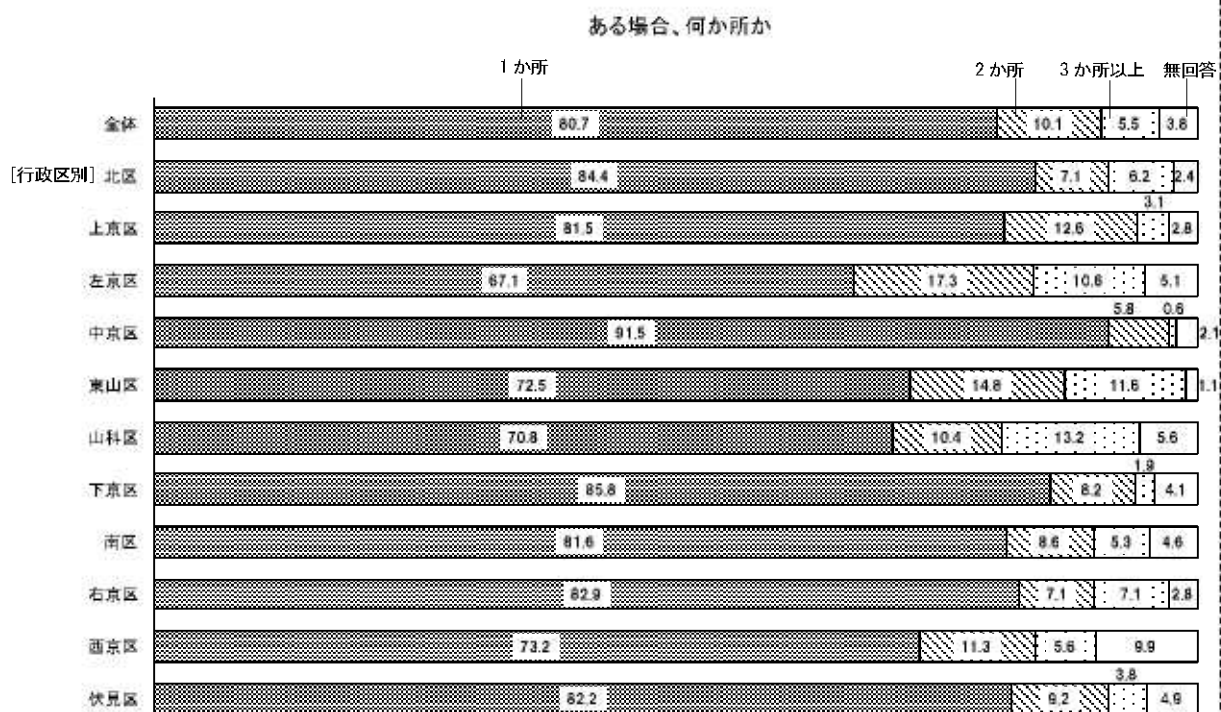
問2 貴会の区域内にお地蔵さんはありますか。(以下、特に記載がない限り N=3,684)

① ある	2,632	(71.4%)
② ない	953	(25.9%)
寺預けや別の場所に保管など	80	(2.2%)
無回答	19	(0.5%)



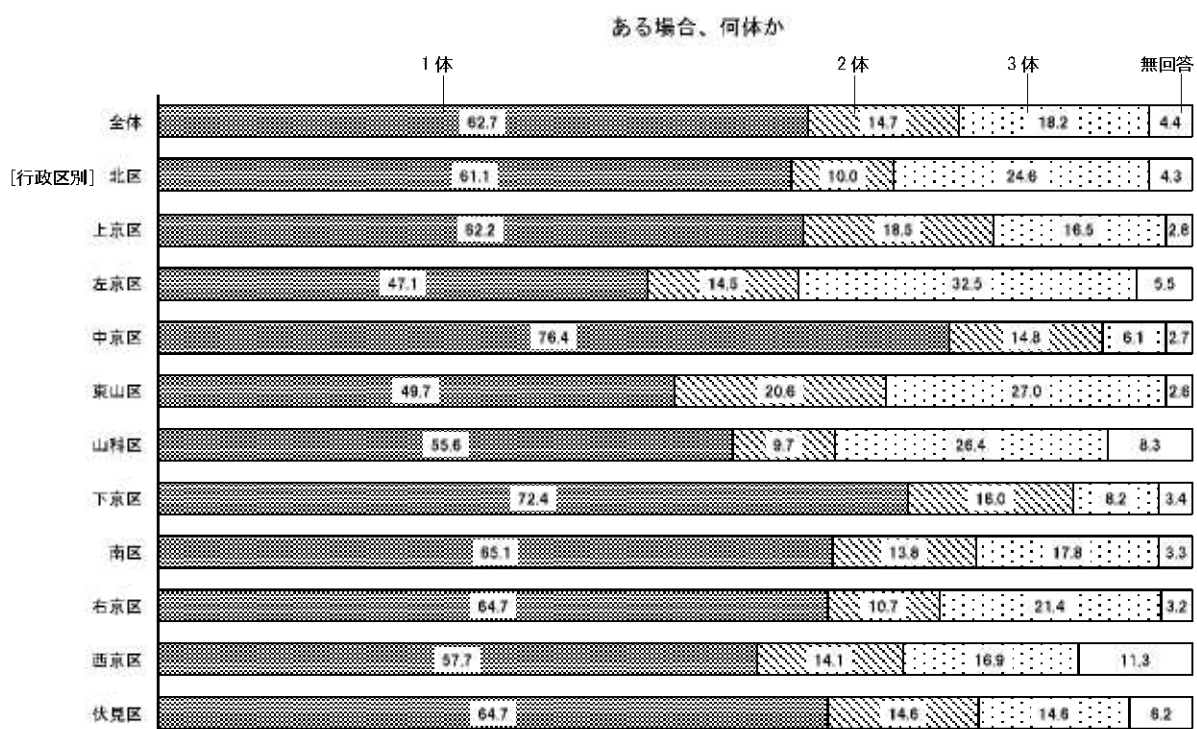
「ある」の場合、何か所に、何体ありますか。(N=2,632)

1 か所	2,124	(80.7%)
2 か所	265	(10.1%)
3 か所以上	144	(5.5%)
無回答	99	(3.8%)



「ある」の場合、何か所に、何体ありますか。(N=2,632)

1 体	1,649	(62.7%)
2 体	386	(14.7%)
3 体以上	479	(18.2%)
無回答	117	(4.4%)



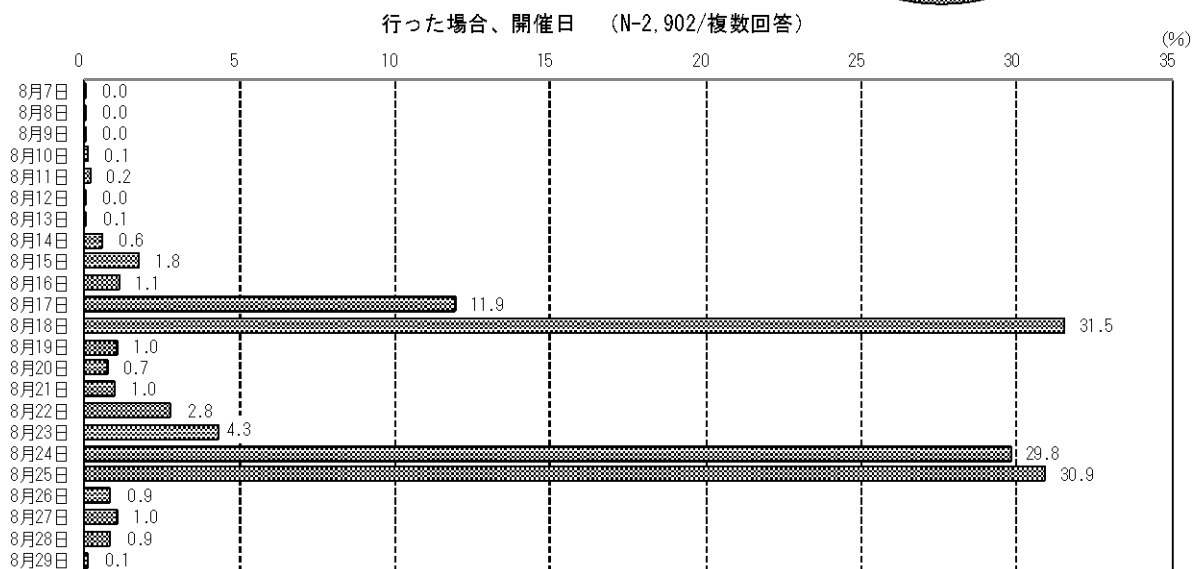
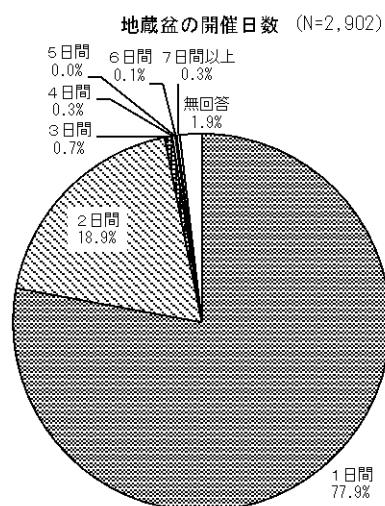
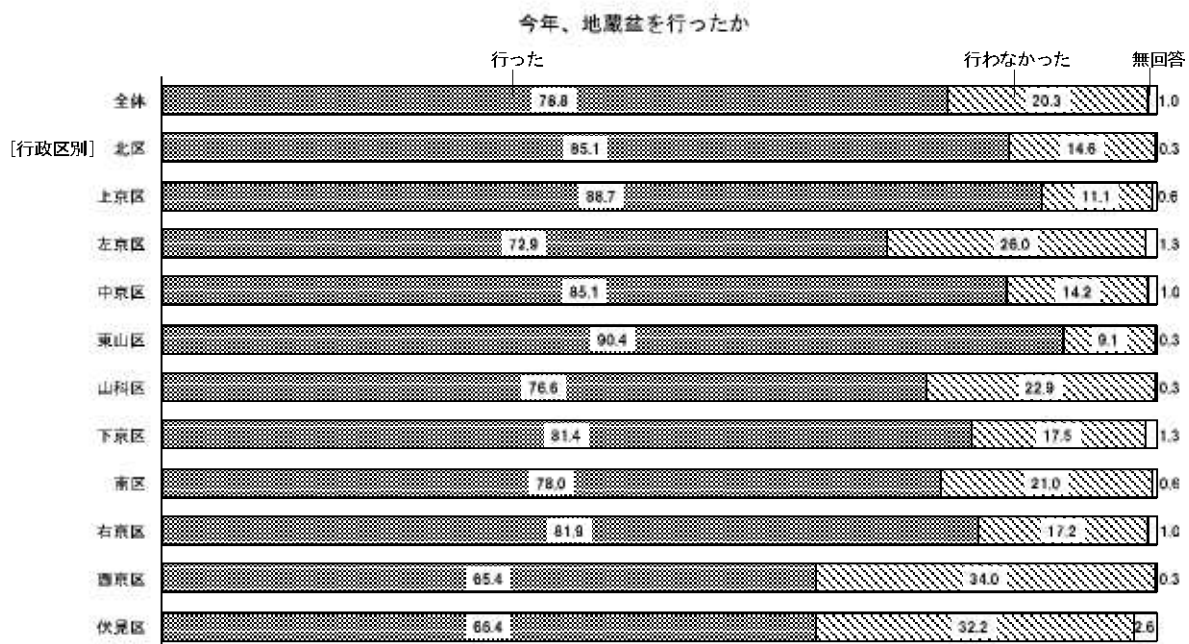
- ・自治会・町内会内にお地蔵さんはあるかどうかの質問に、回答全体では「ある」が 71.4%、「ない」が 25.9%、その他として、寺に預けていたり別の場所に保管しているところが 2.2%あった。
- ・行政区別にみると、お地蔵さんのある自治会・町内会が多いのは東山区 (90.9%) と上京区 (84.4%) であり、一方、お地蔵さんのないところが多いのは西京区 (54.1%) であった。
- ・お地蔵さんがある場合の箇所数は、回答全体では「1 か所」が 80.7%、「2 か所」が 10.1%、「3 か所以上」が 5.5%であった。
- ・行政区別にみると、「1 か所」が多いのは中京区 (91.5%) であり、一方、箇所数の多い自治会・町内会は、左京区 (「2 か所」と「3 か所以上」の計 27.9%) と東山区 (同 26.4%)、山科区 (同 23.6%) に多い。
- ・お地蔵さんがある場合の個体数については、全体では「1 体」が 62.7%、「2 体」が 14.7%、「3 体以上」が 18.2%である。
- ・行政区別にみると、「1 体」の自治会・町内会は中京区 (76.4%) と下京区 (72.4%) に多く、一方、個体数の多い自治会・町内会は、左京区 (「2 体」と「3 体以上」の計 47.0%) と東山区 (同 47.6%) に多い。
- ・総合すると、箇所数及び個体数が多いのは、左京区と東山区の自治会・町内会であり、1 ヶ所 1

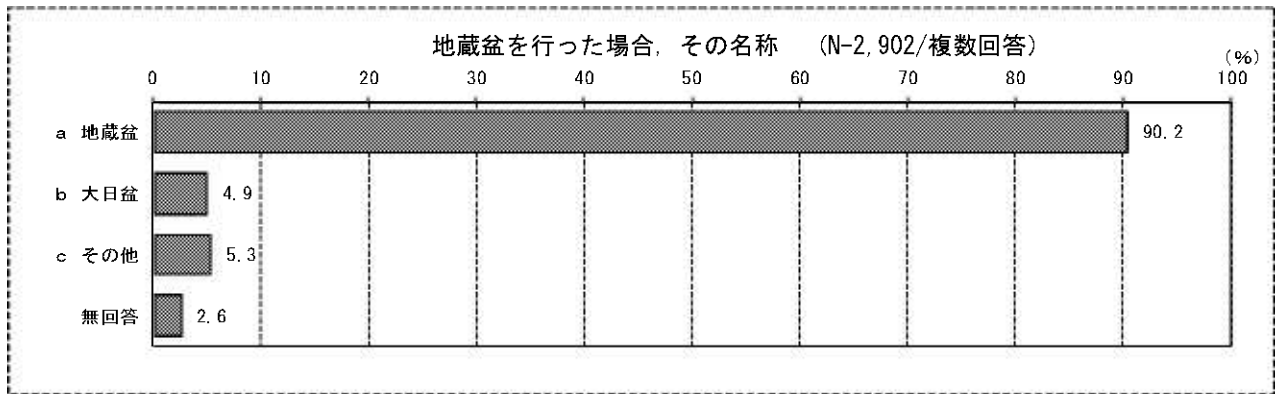
体が多いのは、中京区の自治会・町内会であった。

今年、地藏盆を行ったか

問3 貴会では今年、地藏盆を行いましたか。

① 行った	2,902	(78.8%)
② 行わなかった	747	(20.3%)
無回答	35	(1.0%)





- ・調査時である 2013 年に地蔵盆を行ったか、については、78.8%の区域が行っており、行わなかったところは 20.3%である。お地蔵さんがある 2,902 の自治会・町内会では、ほとんどが地蔵盆を行っている (94.3%)。

お地蔵さんがないにもかかわらず、地蔵盆を行ったところは 349 地域 (お地蔵さんがない 953 地域の 36.6%) ある。寺に預けている、あるいは他の場所に保管しているが地蔵盆を行ったのは 70 地域 (寺預けなど 80 地域の 87.5%) である。一方、お地蔵さんはあるが地蔵盆をしなかったのは、133 地域 (2,632 地域の 5.1%) であった。

- ・お地蔵さんはないが地蔵盆を行った 349 地域で、お地蔵さんをどうしたかを聞くと、「借りてくる」が 91 地域 (26.1%)、「仏画を使用する」が 82 地域 (23.5%)、「その他」が 119 地域 (34.1%) となっている。

「その他」の内容を詳しくみると、67 地域 (119 地域の 56.3%) が、夏祭りという名称で行う、子供祭りとして行う、何も置かない、といった「なしで済ませる」というものである。また、19 地域が、子どもが少なかったり、お地蔵さんを共同管理している関係から、「近くの町内会と合同で」「別の町内会地蔵盆に参加させてもらう」「地蔵尊を持ち回りする」と回答した。さらに、「お寺で行う」「お寺をお参りする」のは 9 地域 (寺に預けている町内会とは別) だが、お地蔵さんは子供たちが毎年描く、など「自分たちで作っている」町内会も 4 地域あった。

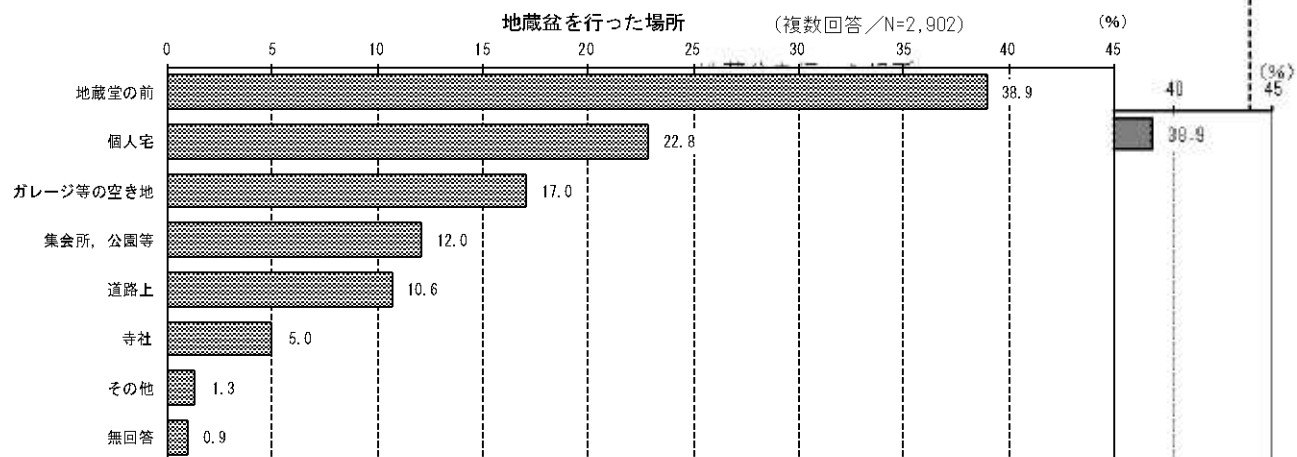
- ・行政区別に、地蔵盆を行ったどうかをみると、行った町内会・自治会の多いのは東山区 (90.4%)、上京区 (88.7%) であり、一方、行わなかったところが多いのは西京区 (34.0%)、伏見区 (32.2%) である。

- ・開催日数については、「1 日間」が 77.9%を占め、「2 日間」18.9%を合わせると、95%以上となる。
- ・調査年は 8 月 18 日、25 日が日曜であった。地蔵盆の開催は、盂蘭盆直後の日曜日である 8 月 18 日と、翌週の土日である 24 日・25 日に集中している。
- ・地蔵盆を行った自治会・町内会にその名称を尋ねたところ、ほとんどが「地蔵盆」であったが、「大日盆」も 4.9%ある。行政区別にみて「大日盆」が多かったのは、東山区である (14.9%)。

地蔵盆を行った場所

問4 地蔵盆を行った場所はどこですか。(N=2,902)

① 地蔵堂の前	1,129 (38.9%)
② その他	
(a) 個人宅（軒先、車庫を含む）	663 (22.8%)
(b) ガレージ等の空地（公共空地や休み中の会社等の前を含む）	494 (17.0%)
(c) 道路上	309 (10.6%)
寺社	144 (5.0%)
集会所・公園等（マンション集会所、小学校や市立保育所を含む）	349 (12.0%)
(d) その他	38 (1.3%)
無回答	27 (0.9%)

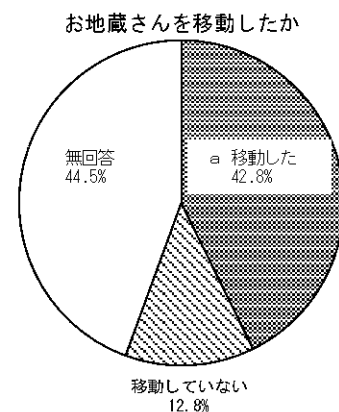


地蔵盆を行った場所（行政区別）（複数回答）

	① 地蔵堂の前	② その他						無回答
		個人宅	の空地 ガレージ等	集会所、公園等	道路上	寺社	その他	
全体	38.9	22.8	17.0	12.0	10.6	5.0	1.3	0.9
行政区別	北区	45.6	16.3	11.0	12.9	10.6	4.2	0.8
	上京区	31.8	36.6	19.3	5.9	2.9	5.6	0.5
	左京区	42.7	9.0	16.1	12.2	12.2	6.3	1.6
	中京区	32.3	34.7	13.5	5.0	6.6	6.9	0.5
	東山区	55.9	16.0	12.8	3.7	6.4	6.9	0.5
	山科区	41.3	5.4	11.4	20.4	19.8	2.4	0.6
	下京区	40.3	32.2	10.7	5.0	3.7	6.7	0.3
	南区	44.9	12.6	16.8	14.4	9.0	2.4	1.8
	右京区	36.7	9.4	19.9	16.1	13.6	3.8	1.7
	西京区	37.5	5.8	10.6	29.8	11.5	1.9	2.9
	伏見区	34.8	19.3	15.5	20.1	5.1	3.3	2.5

お地蔵さんを移動しましたか。(前問で「②その他」回答者N=1,892)

(a) はい	809 (42.8%)
(b) いいえ	243 (12.8%)
無回答	841 (44.5%)

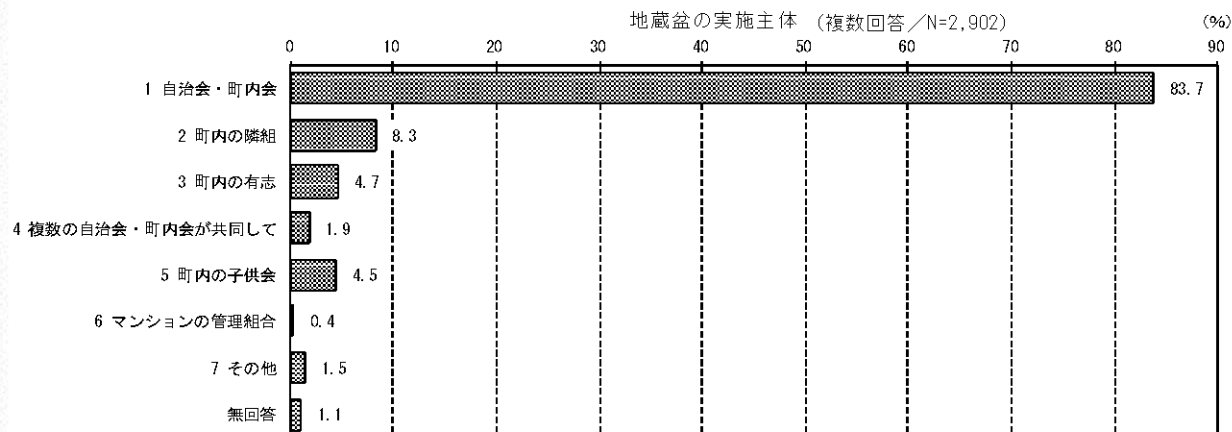


- ・地蔵盆を行った場所は、「地蔵堂の前」が最も多く（38.9%）、それ以外は「個人宅」（22.8%）、「ガレージ等の空き地」（17.0%）、「集会所・公園等」（12.0%）、「道路上」（10.6%）である。
- ・行政区別にみると、「地蔵堂の前」で行う自治会・町内会が多いのは東山区（55.9%）である。
「個人宅」で行うところが多いのは上京区（36.6%）、中京区（34.7%）、下京区（32.2%）であり、とくに上京区と中京区は「地蔵堂の前」よりも多くなっている。
「集会所、公園等」が目立って多いのは西京区であり（29.8%）、ここでは逆に、「個人宅」が5.8%と少ない。
山科区も、西京区と同様「個人宅」が少ない（5.4%）。「集会所、公園等」（20.4%）も比較的多いが、他の区と比べると「道路上」が目立って多い（19.8%）。
- ・「その他」の回答者に、お地蔵さんを移動したか、を尋ねると、「移動した」が 42.8%、「移動していない」が 12.8%であった。
行政区別にみると、「移動した」町内会が比較的多いのは、伏見区（52.1%）と上京区（49.6%）である。「移動していない」町内会が比較的多いのは、西京区（19.4%）、東山区（18.9%）、左京区（18.8%）となっている。

地蔵盆の実施主体

問5 地蔵盆の実施主体はどこですか。(N=2,902)

① 自治会・町内会	2,429	(83.7%)
② 町内の隣組	242	(8.3%)
③ 町内の有志	136	(4.7%)
④ 複数の自治会・町内会が共同して	54	(1.9%)
⑤ 町内の子供会	130	(4.5%)
⑥ マンションの管理組合	12	(0.4%)
⑦ その他	44	(1.5%)
無回答	32	(1.1%)



地蔵盆の実施主体 (行政区別)

	① 自治会・町内会	② 町内の隣組	③ 町内の有志	④ 複数の自治会・町内会が共同して	⑤ 町内の子供会	⑥ マンションの管理組合	⑦ その他	無回答
全体	83.7	8.3	4.7	1.9	4.5	0.4	1.5	1.1
行政区別	北区	82.5	8.4	4.9	2.3	2.3	0.0	2.3
	上京区	89.8	8.0	2.4	0.5	1.3	0.3	0.5
	左京区	74.5	10.2	9.0	3.5	5.9	0.8	3.5
	中京区	85.7	9.3	3.2	1.6	1.6	0.5	1.3
	東山区	81.4	11.7	8.0	0.5	1.6	0.5	1.1
	山科区	82.0	3.6	7.2	1.8	12.0	0.6	4.2
	下京区	86.2	9.7	5.0	1.0	2.3	0.0	0.7
	南区	71.3	11.4	8.4	4.8	5.4	1.2	1.8
	右京区	86.0	4.9	3.5	3.1	9.1	0.3	1.0
	西京区	84.6	1.9	0.0	1.0	14.4	0.0	1.9
	伏見区	87.1	8.4	2.5	1.5	4.1	0.3	1.5

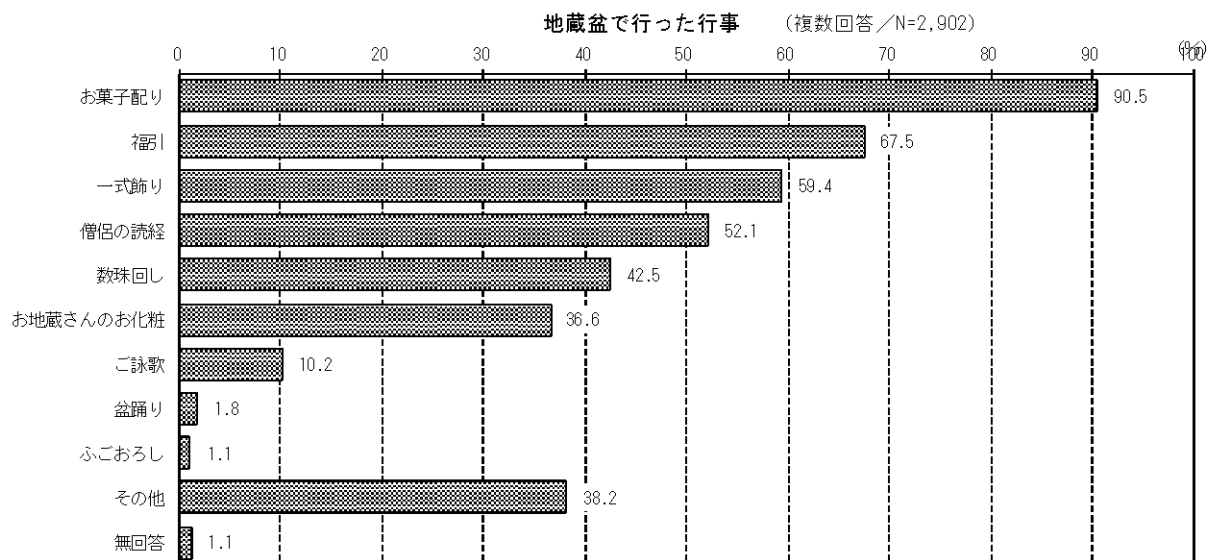
- ・地蔵盆の実施主体は、「自治会・町内会」が83.7%を占める。
- ・行政区別にみると、「自治会・町内会」が少ないのは左京区(74.5%)、南区(71.3%)であり、その代わりに「町内の隣組」や「町内の有志」が比較的多い。
「町内の隣組」「町内の有志」を合わせると約20%に達するのは、上述の左京区・南区と、東山区である。

なお、「町内の子供会」が比較的多いのは、西京区(14.4%)と山科区(12.0%)である。両者に極端な差はないものの、山科区は「町内の隣組」が少なく、「町内の有志」が多いのに対して、西京区は、「町内の隣組」も「町内の有志」もほとんどなく、「町内の子供会」だけが全体傾向より10ポイント高いのが特徴である。

地蔵盆で行った行事

問6 地蔵盆で行った行事について、すべて教えてください。

① 僧侶の読経	1,508	(52.1%)
② 数珠回し	1,228	(42.4%)
③ ご詠歌	295	(10.2%)
④ お地蔵さんのお化粧	1,058	(36.5%)
⑤ お菓子配り	2,618	(90.4%)
⑥ 福引	1,956	(67.6%)
⑦ ふごおろし	31	(1.1%)
⑧ 盆踊り	52	(1.8%)
⑨ 一式飾り	1,720	(59.4%)
⑩ その他	1,107	(38.2%)
無回答	34	(1.2%)



地蔵盆で行った行事 (行政区別)

		お菓子配り	福引	一式飾り	僧侶の読経	数珠回し	お地蔵さんのお化粧	ご詠歌	盆踊り	ふごおろし	その他	無回答
全体		90.5	67.5	59.4	52.1	42.5	36.6	10.2	1.8	1.1	38.2	1.1
行政区別	北区	93.2	73.4	61.6	57.0	52.1	31.2	6.5	1.1	0.8	37.3	1.1
	上京区	93.9	65.8	72.5	57.2	66.0	24.9	3.7	0.3	2.4	38.2	0.0
	左京区	93.3	68.6	49.4	40.4	28.2	39.2	15.7	2.0	1.6	48.6	2.7
	中京区	92.1	66.1	68.8	58.7	53.4	30.4	8.7	1.1	1.6	35.7	0.0
	東山区	80.9	54.3	62.8	60.1	33.5	37.8	4.3	1.1	0.5	37.8	1.1
	山科区	94.0	80.8	45.5	46.1	31.1	41.3	2.4	3.6	1.2	42.5	1.8
	下京区	84.2	53.0	65.8	67.1	41.3	31.5	6.0	0.7	0.7	29.5	0.7
	南区	88.0	62.3	55.7	52.7	16.8	59.3	7.8	0.6	0.0	39.5	1.2
	右京区	94.4	86.0	51.4	50.0	27.6	42.3	12.9	1.7	0.7	37.8	1.4
	西京区	88.5	76.0	36.5	30.8	17.3	25.0	8.7	10.6	0.0	46.2	3.8
伏見区	90.6	65.5	58.6	39.6	51.3	46.2	25.4	2.8	0.8	38.6	0.8	

- ・地蔵盆で行った行事は、最も多かったのが「お菓子配り」(90.5%)で、以下、「福引」67.5%、「一式飾り」59.4%、「僧侶の読経」52.1%、「数珠回し」42.5%、「お地蔵さんの化粧」36.6%となっている。
- ・「一式飾り」は、あるテーマに沿って、日用品や自然物などを材料とし、素材を生かして組み立てる飾り物を指すものである。この調査では50%を超える高い比率であるが、「飾り物一式」の意味に誤解された可能性が高いため、「一式飾り」について、これ以上は言及しない。
- ・行政区別にみると、「お菓子配り」はいずれの区もさほどの差異はないが、「福引」は山科区(80.8%)と右京区(86.0%)で多くなっている。「僧侶の読経」が多いのは、下京区(67.1%)と東山区(60.1%)である。
 そのほかの特徴は、上京区と中京区で「数珠回し」を行う自治会・町内会が多いこと(全体で42.5%に対し、上京区66.0%、中京区53.4%を占める)、また、南区と伏見区で「お地蔵さんの化粧」を行うところが多いこと(全体で36.6%に対し、南区59.3%、伏見区46.2%を占める)である。

「地蔵盆」に関するアンケート

京都市は、「市民が残したい“京都をつなぐ無形文化遺産”制度」を創設し、世代を越えて伝えられてきた無形文化遺産を大切に引き継いでいくための取組を進めています。

この度、京都の大切な宝である「地蔵盆」の実施状況等を調査するため、以下のアンケートを実施いたしますので、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

※ 選択式の設問は、該当する項目の□に印（☑）を入れて下さい。

※ 「大日盆」などの盆行事も広く「地蔵盆」に含めてご回答をお願いします。

（問１）貴会（自治会・町内会）について、お教えてください。

名称 _____ 所在地（住所） _____ 区 _____ 学区 _____

（問２）貴会の区域内にお地蔵さんはありますか。

□① ある

└─ 何か所に何体ありますか。 () か所に 計 () 体

□② ない

└─ 地蔵盆の時はお地蔵さんを □(a) 借りてくる □(b) 仏画を使用する
□(c) その他 ()

（問３）貴会では今年、地蔵盆を行いましたか。

□① 行った。

└─ 開催日 ____月 ____日 ～ ____月 ____日
名 称 □(a) 地蔵盆 □(b) 大日盆 □(c) その他 ()

□② 行わなかった。

└─ 過去に行っていた場合、何年まで行っていましたか。（昭和・平成・西暦 ____）年まで
└─ 地蔵盆の代わりに行っている行事がありましたら教えてください。
()
└─ 過去に行った地蔵盆についてわかる範囲で、以下の質問にお答えください。

（問４）地蔵盆を行った場所はどこですか。

□① 地蔵堂の前

□② その他

└─ □(a) 個人宅 □(b) ガレージ等の空地 □(c) 道路上
□(d) その他 ()
└─ その際、お地蔵さんを移動しましたか。 □(a) はい □(b) いいえ

（問５）地蔵盆の実施主体はどこですか。

□① 自治会・町内会 □② 町内の隣組 □③ 町内の有志
□④ 複数の自治会・町内会が共同して □⑤ 町内の子供会
□⑥ マンションの管理組合 □⑦ その他 ()

（問６）地蔵盆で行った行事について、すべてお教えてください。

□① 僧侶の読経 □② 数珠回し □③ ご詠歌 □④ お地蔵さんのお化粧
□⑤ お菓子配り □⑥ 福引 □⑦ ふごおろし □⑧ 盆踊り
□⑨ 一式飾り □⑩ その他 ()

◆ご記入いただいた方のお名前、ご連絡先を差し支えなければご記入ください

（お名前） _____ （電話番号） _____

質問は以上です。ご協力誠にありがとうございました。

このアンケートは、自治会・町内会アンケートといっしょに返信用封筒に入れて、ご返送ください。

【このアンケートに関するお問合せ先】

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 担当：伊藤，村上，平井

電 話：０７５－３６６－１４９８／ＦＡＸ：０７５－２１３－３３６６

山科の地蔵盆

平成 25 年（2013 年）



ふるさとの良さを活かしたまちづくりを進める会
(略称 ふるさとの会)

地蔵盆調査報告

学区	2013	2012	合計
陵ヶ岡	3	15	18
鏡山	11	20	31
安朱	1	11	12
西野	3	2	5
山階	1	10	11
音羽	4	14	18
音羽川	9	7	16
北部	32	79	111
百々	8	15	23
勸修	6	8	14
山階南	2	12	14
大塚	3	20	23
大宅	5	19	24
小野	2	8	10
南部	26	82	108
合計	58	161	219

ふるさとの会で地蔵盆の調査をしました

○2012 年度は 161 ヶ所調査しました

○2013 年度は昨年の未調査・不十分な所の補充調査をしました

○調査は部員 12 名が現地で町内役員にアンケートの記入・対話を基本にすすめました

★当初の予想を上回る 219 ヶ所の調査

★すべての学区地域で行われていました

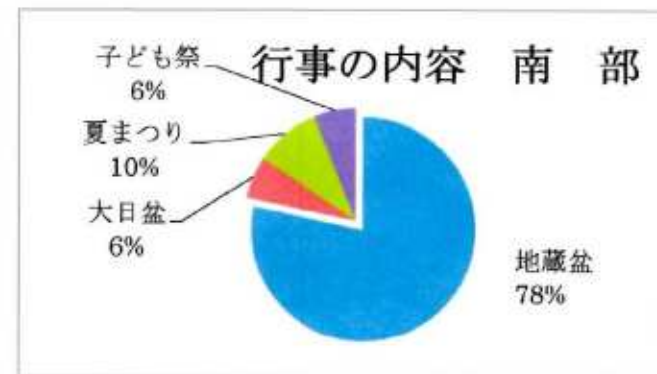
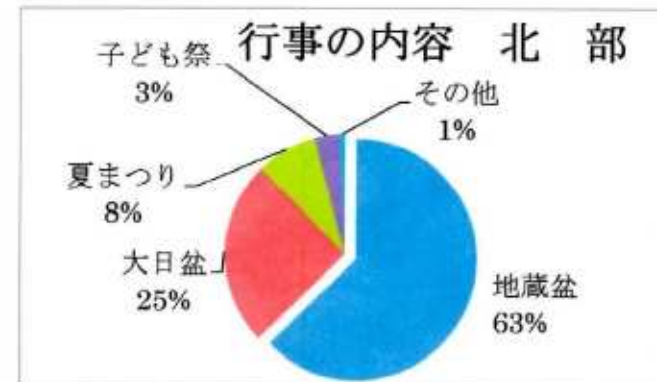
★少子高齢化で行われていない所もあった

地蔵盆など行事の内容

学 区	地蔵盆	大日盆	夏まつり	子ども祭	その他	合計
陵ヶ岡	14	4	2			20
鏡 山	18	10	2	3		33
安 朱	7	5	1	1		14
西 野	5		1			6
山 階	8	2	2		1	13
音 羽	11	7	1			19
音羽川	13	2	1			16
北 部	76	30	10	4	1	121
百 々	20	3		1		24
勸 修	12	1	3			16
山階南	13		2	1		16
大 塚	16	3	2	3		24
大 宅	21		3	1		25
小 野	8		1	1		10
南 部	90	7	11	7		115
合 計	166	37	21	11	1	236

納涼会

複数回答北部10ヶ所 南部7ヶ所



★地蔵盆は北部で63% 南部で78%

★大日盆は北部に多い

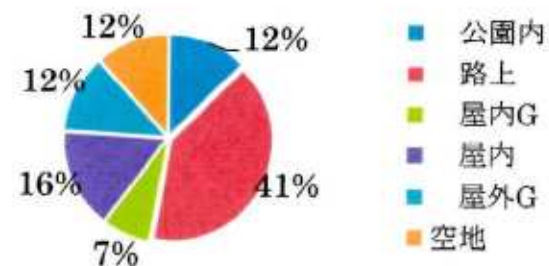
★旧三条御陵東部で山科地蔵の接待のため
の廻り地蔵(軸像)が数軒で廻り持ち

地蔵盆の開催場所

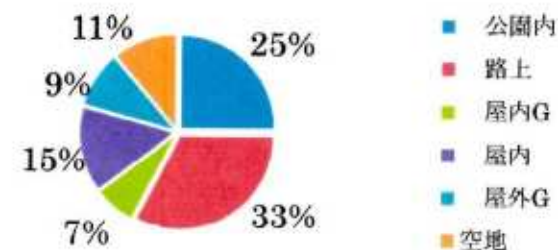
学 区	公園内	路上	屋内G	屋内	屋外G	空地	合計
陵ヶ岡	2	8	1	5	2	1	19
鏡 山	3	17	2	6	3	5	36
安 朱	1	6	4	1			12
西 野	1		1	2		1	5
山 階	3	3			2	3	11
音 羽	2	6	1	5	4	4	22
音羽川	3	9			4		16
北 部	15	49	9	19	15	14	121
百 々	10	9	2		1	2	24
勸 修	3	2	1	3	1	5	15
山階南	4	10		1		28	43
大 塚	4	7	3	7	1	3	25
大 宅	6	6		6	4	3	25
小 野	2	4	2		4		12
南 部	29	38	8	17	11	13	116
合 計	44	87	17	36	26	27	237

複数回答 北部10ヶ所 南部8ヶ所

地蔵盆の開催場所北部



地蔵盆の開催場所 南部

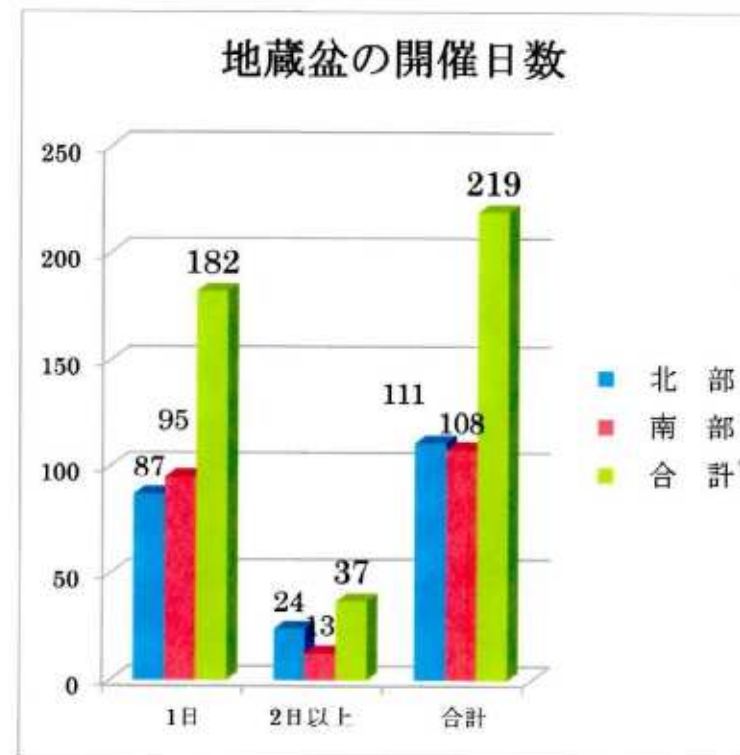


★開催場所は路上が多い 北部 41% 南部 33%です。

★南部は公園が 25%で北部の倍

地蔵盆の開催日数

学 区	1日	2日以上	合計
陵ヶ岡	15	3	18
鏡 山	26	5	31
安 朱	7	5	12
西 野	3	2	5
山 階	9	2	11
音 羽	13	5	18
音羽川	14	2	16
北 部	87	24	111
百 々	21	2	23
勸 修	11	3	14
山階南	10	4	14
大 塚	22	1	23
大 宅	23	1	24
小 野	8	2	10
南 部	95	13	108
合 計	182	37	219



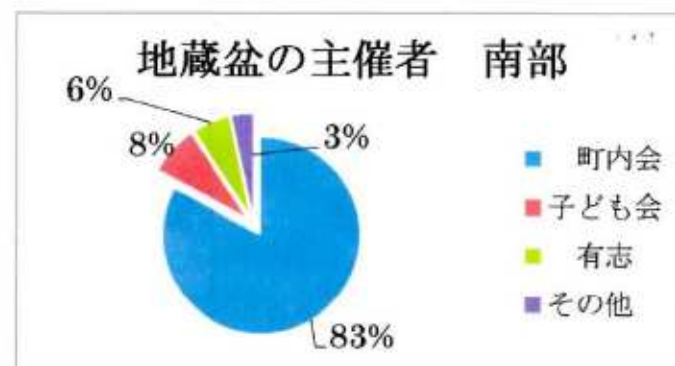
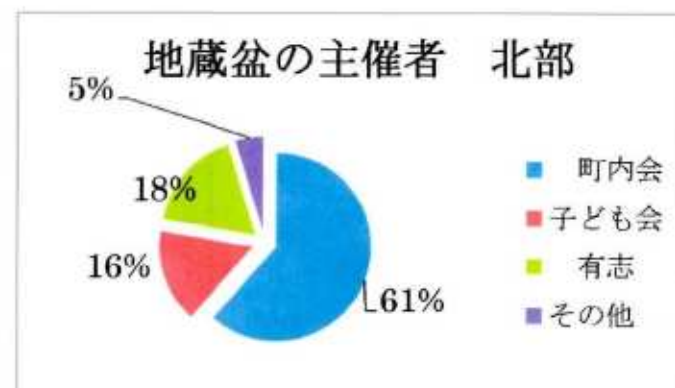
★開催日数は昔は2日が多く 現在は土・日の
いずれかの一日が多い

★北部は2日以上が22%あり南部の倍です

地蔵盆の主催者

学 区	町内会	子ども会	有志	その他	合計
陵ヶ岡	15	6	1		22
鏡 山	17	5	10	2	34
安 朱	6	3	3	1	13
西 野	4	1		1	6
山 階	10	2	1		13
音 羽	13		5	1	19
音羽川	12	3	2	1	18
北 部	77	20	22	6	125
百 々	21		2		23
勸 修	10	2		2	14
山階南	13	2	1		16
大 塚	19		4	1	24
大 宅	23	3			26
小 野	10	2		1	13
南 部	96	9	7	4	116
合 計	173	29	29	10	241

複数回答北部14ヶ所 南部8ヶ所

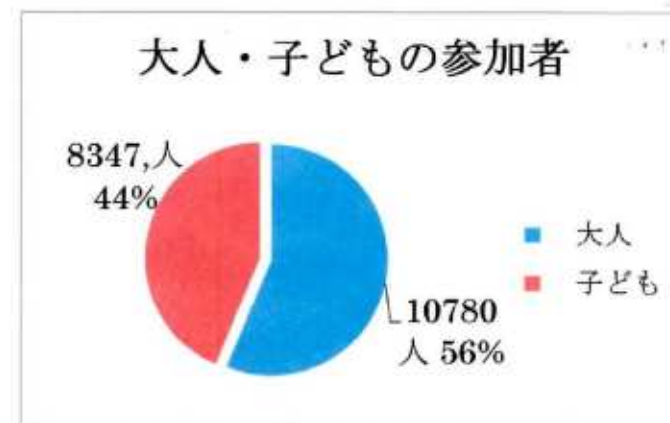
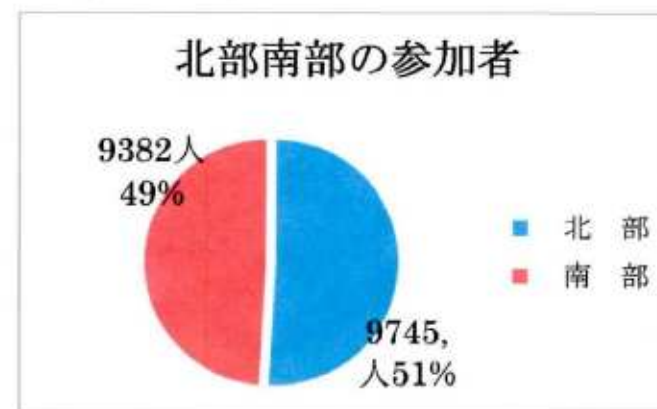


★主催者は町内会が中心で北部 61% 南部 83%です

★北部は有志が近所・大日盆を別に行うので 18%で南部より多い

地蔵盆の参加者

学 区	参加者	大人	子ども
陵ヶ岡	1238	675	563
鏡 山	2463	1780	683
安 朱	967	534	433
西 野	504	230	274
山 階	891	505	386
音 羽	2006	1152	854
音羽川	1676	932	744
北 部	9745	5808	3937
百 々	2037	1417	620
勸 修	1349	620	729
山階南	1558	820	738
大 塚	1352	572	780
大 宅	2074	1081	993
小 野	1012	462	550
南 部	9382	4972	4410
合 計	19127	10780	8347



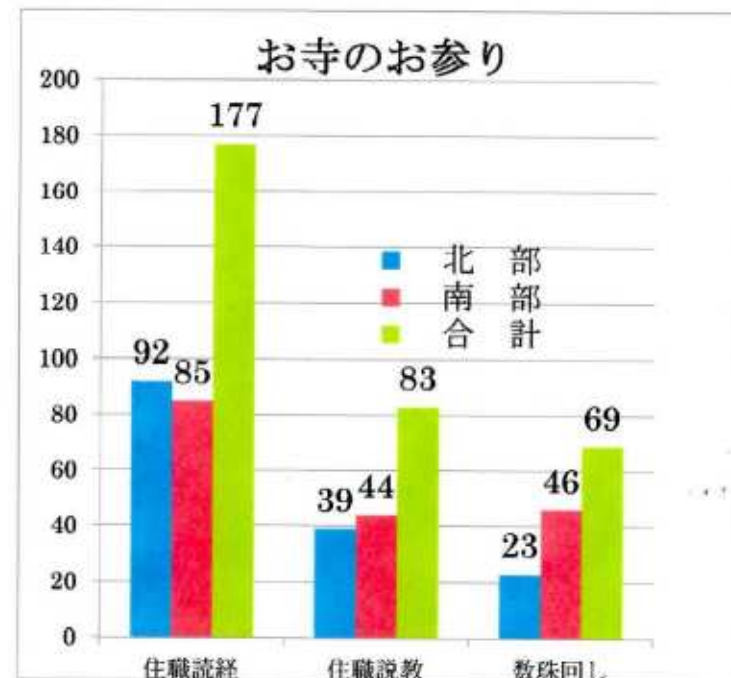
★参加者は北部・南部変わらず

★参加者 150 名以上は 35 ヶ所

★鏡山・音羽・百々・大宅は 2000 人を超える

地蔵盆のお寺のお参り

学 区	住職読経	住職説教	数珠回し
陵ヶ岡	16	10	3
鏡 山	23	8	6
安 朱	12	4	3
西 野	4	1	2
山 階	9	7	4
音 羽	15	3	2
音羽川	13	6	3
北 部	92	39	23
百 々	19	11	5
勸 修	11	8	2
山階南	12	8	8
大 塚	16	2	8
大 宅	20	12	16
小 野	7	3	7
南 部	85	44	46
合 計	177	83	69



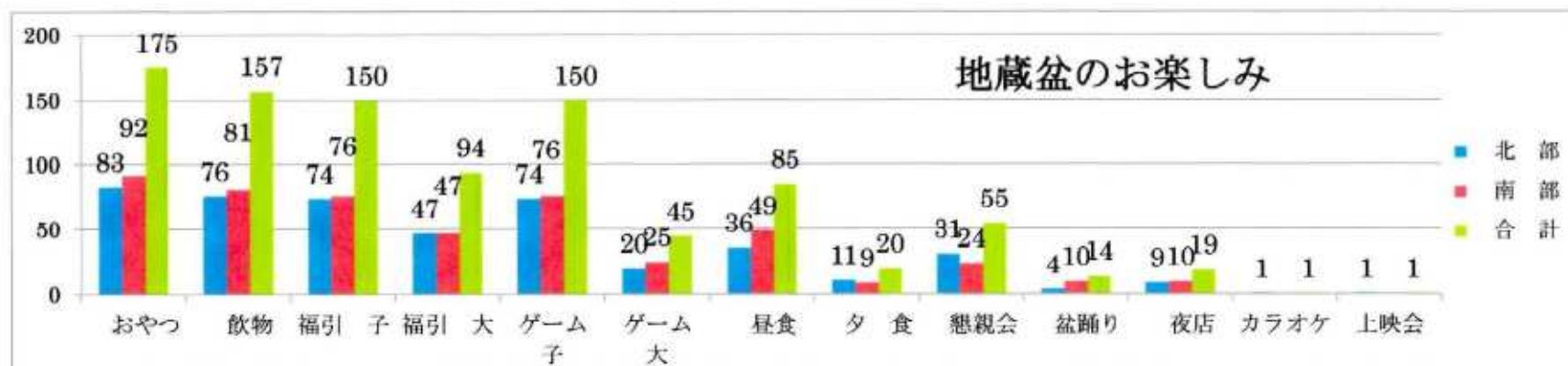
★お参りの読経が 81% 数珠まわし32%と予想を超える

★大宅はお参りが 83% 数珠廻しが 67%と多い

★音羽では早朝読経の時子ども 30 人・大人 50 人参加の町内がありました

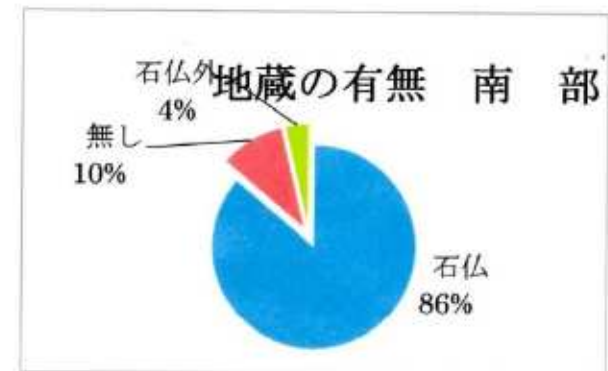
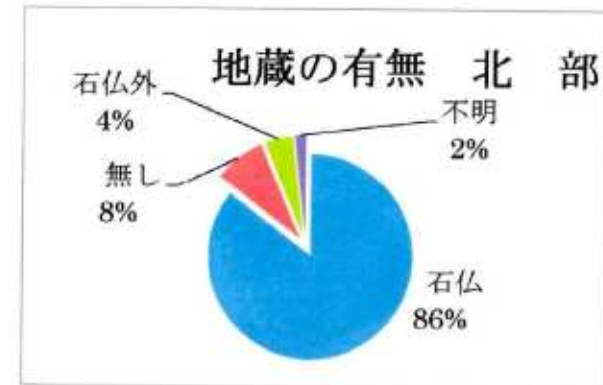
地蔵盆のお楽しみ

学 区	おやつ	飲物	福引 子	福引 大	ゲーム 子	ゲーム 大	昼食	夕 食	懇親会	盆踊り	夜店	カラオケ	上映会
陵ヶ岡	16	17	14	8	11	5	6	1	3		1		
鏡 山	22	21	18	13	19	4	11	3	10	3	2		
安 朱	8	5	7	7	10	2	3	2	5	1			
西 野	5	3	5	4	5	1	1	1	2		1		1
山 階	9	8	7	5	6	2	5		7		1	1	
音 羽	11	8	11	7	11	3	2	1	3		2		
音羽川	12	14	12	3	12	3	8	3	1		2		
北 部	83	76	74	47	74	20	36	11	31	4	9	1	1
百 々	17	16	14	8	15	4	8	3	8		3		
勸 修	12	11	9	4	6	1	3	3	3	1	3		
山階南	12	11	10	7	9	3	6	1	4	9	2		
大 塚	18	14	15	8	17	4	9		2				
大 宅	23	21	19	12	21	9	16	2	4		1		
小 野	10	8	9	8	8	4	7		3		1		
南 部	92	81	76	47	76	25	49	9	24	10	10		
合 計	175	157	150	94	150	45	85	20	55	14	19	1	1



地蔵盆のおじぞうさん

学 区	石仏	無し	石仏外	不明	合計	
陵ヶ岡	17	1			18	
鏡 山	23	4	3	1	31	木像 絵画
安 朱	11		1		12	
西 野	5				5	
山 階	10		1		11	軸像
音 羽	16	1		1	18	
音羽川	13	3			16	
北 部	95	9	5	2	111	
百 々	20	1	2		23	木像 軸像
勸 修	10	3	1		14	写真
山階南	12	2			14	
大 塚	18	4	1		23	木像
大 宅	23	1			24	
小 野	10				10	
南 部	93	11	4		108	
合 計	186	19	10	2	219	



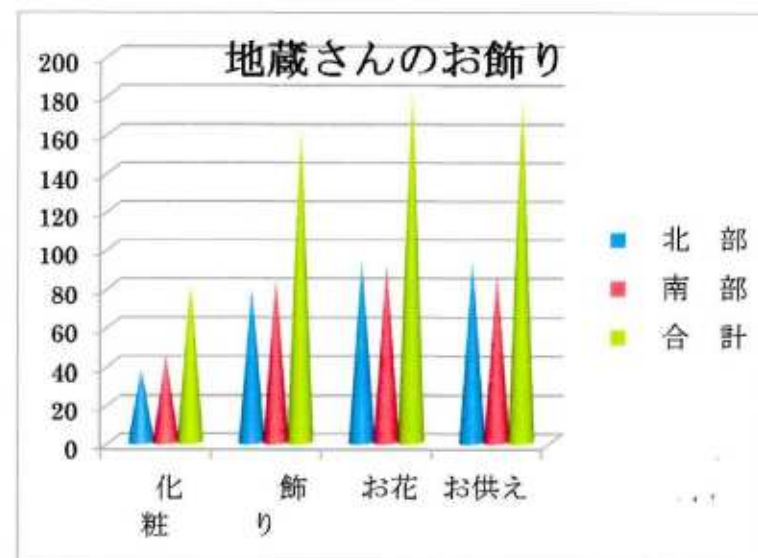
★石仏が北部・南部とも 86%である

★石仏以外では木像・軸像・写真・絵画など

★お地蔵さんのない所は 19ヶ所でした

地蔵さんのお飾り

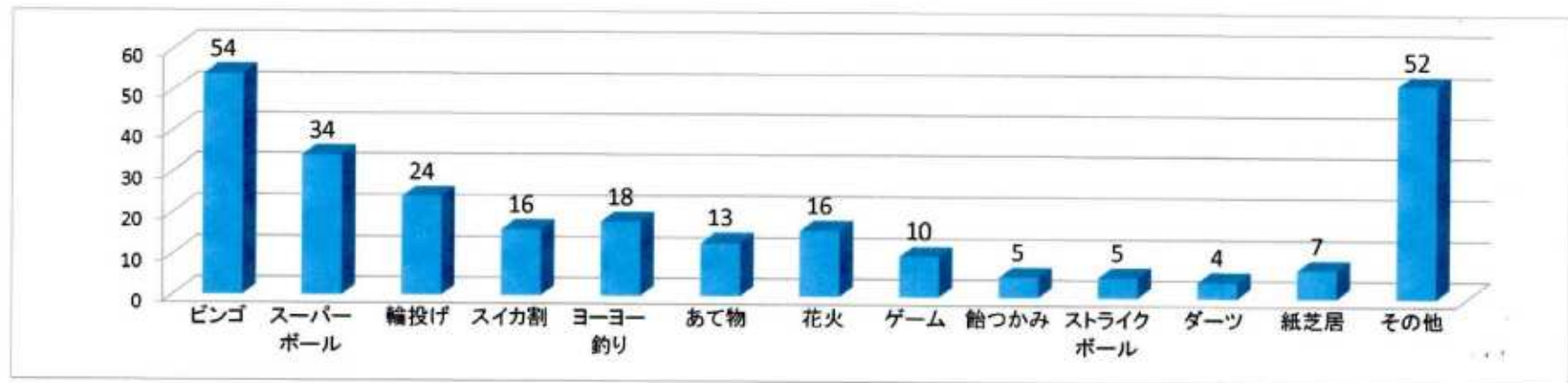
学 区	化 粧	飾り	お花	お供え	提灯	行燈	その他
陵ヶ岡	14	17	17	17	17	3	
鏡 山	9	18	24	25	21	11	3
安 朱		9	12	11	15	1	2
西 野	3	5	5	5	5	5	
山 階	5	7	9	9	8	4	
音 羽	2	14	15	15	17	3	
音羽川	5	10	12	12	9	2	
北 部	38	80	94	94	92	29	5
百 々	5	17	21	18	19	8	
勤 修	5	9	10	10	10	5	1
山階南	6	13	12	12	14	6	
大 塚	7	15	17	17	16	4	2
大 宅	16	21	22	20	15	2	
小 野	6	10	10	10	7	3	
南 部	45	85	92	87	81	28	3
合 計	83	165	186	181	173	57	8



★北部・南部に飾りなど違いはあまりない

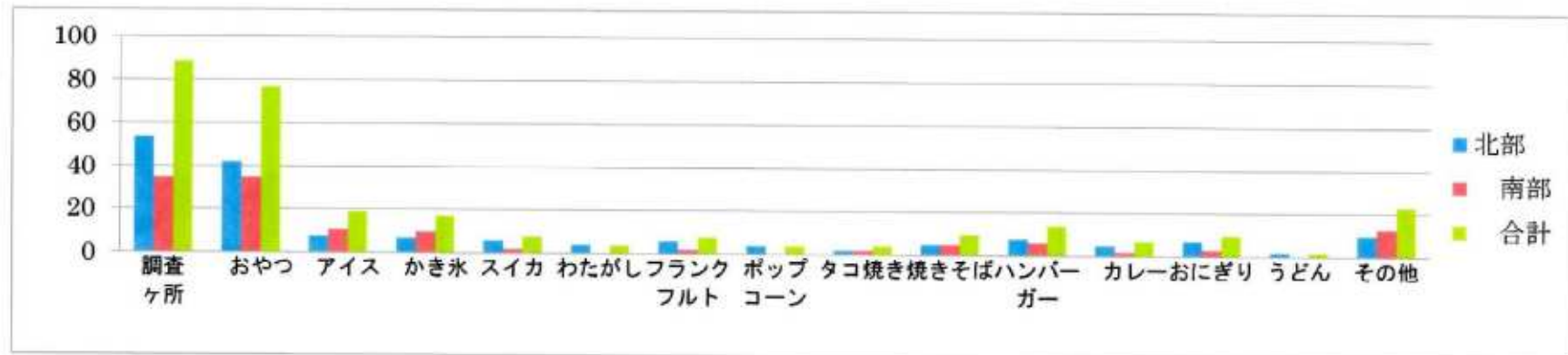
★石仏の化粧は北部 34%南部は 42%です

89ヶ所のプログラムのゲーム・お楽しみ



その他野内容 金魚すくい 3 射的 3 ジャンケン 3 スマートボール 2 宝探し2 ボーリング 2 折紙 2 映画 2

風船割り お魚釣り サメ釣り 掘み取り ルーレット ボールたたき あやとり イントロゲーム キックでゲーム バロンアート くじ引き
ぷるんQ ふにや玉すくい アヒルつかみ サイコロ パットゴルフ 人形劇 和太鼓 フラダンス ハーモニカ など



その他のおやつなど たこせん 6 おでん4 焼き鳥 2 トウモロコシ 2
パン 流しソーメン ソフトクリーム みたらし

山科の地蔵盆

平成二十六年五月三〇日 ふるさとの会 浅井定雄

はじめに（報告要旨）

人口一三万五〇〇〇人の山科区では約二、百数十カ所近い地域で地蔵盆が行われている。私たち「ふるさとの会」では、平成一四年と二五年の八月にその中の二一九カ所の地蔵盆を巡り調査を行った。

その中では、僧侶の説経・数珠回し・福引・行灯、灯籠飾りなどの伝統行事だけでなく、ところによっては、昼食・夕食を共にしたり、盆踊りなど、さまざまな行事が営まれている。そして、同時に子どもたちのための行事が組まれ、絵画展、作品展、行灯や地蔵飾りに子ども役割があるなど、教育的配慮もなされている。何よりも、今日の地蔵盆は、地域の絆を取り戻し、地域の大人と子どもとが共に過ごし、交流を深めるコミュニティの形成の場となっている。また、子どもの少なくなった旧集落で「地蔵盆」が停滞している反面、団地など新しい地域で地蔵盆行事が発足していることも特徴的である。

こうした現在の山科区における地蔵盆の実態と共に、その中で行われている取り組みが、地域のコミュニケーション形成や、子どもの発達にどのような影響を与えているのかを考察し、報告する。

北花山北部町内会地蔵尊



(一) 地域に根付く地蔵盆

① 京都と地蔵盆

京都では、古くから「地蔵盆」などの行事を通じて、地蔵信仰が定着している。山科でも区内各地、各所で「お地蔵さん」を見ることができ、その数はおそらく約六三〇カ所、一五〇〇体を超える。ふるさとの会地蔵調査部会によって山科のお地蔵さんが調査され、平成二五年三月に冊子『山科のお地蔵さん巡り』が完成したが、たいへんな労作であり、ふるさとの会はじめ山科区民のとりこも貴重な財産となった。

また、町内単位の「地蔵盆」も各地で行われ、夏の子どもの楽しみの一つとなっている。山科区四ノ宮地域にある「山科地蔵（四宮地蔵）」は、山科におけるこうした「お地蔵さん」や「地蔵盆」のシンボリック存在でもある。

「地蔵盆」、別名「提灯地蔵盆」とも言うが、正式には、地蔵菩薩の縁日（毎月二四日）であり、なおかつお盆の期間中でもある旧暦七月二四日に向け、その前日の宵縁日を中心とした二日間の期間を指し、またそのうちの日を選んで行われる地蔵菩薩の祭のことをいう。ただし、地蔵盆は一般には寺の中に祀られている地蔵菩薩を対象とした祭りではない。道祖神信仰と結びついた路傍あるいは街角（辻）の地蔵が対象となっている。

旧暦七月二四日以外の地蔵菩薩の縁日の二四日は「地蔵会」「地蔵祭」と呼ばれるが、旧暦七月二四日については盂蘭盆（お盆）期間中であり、それにちなんで「地蔵盆」と呼



小金塚第二町内地蔵盆

小金塚第三町内地蔵盆



ばれるようになった。現代では、参加する人々の仕事などに合わせ、多少日程をずらして上日に行うところも増えている。地蔵盆は全国的に行われている風習ではあるが、滋賀、京都、大阪、若狭地域など近畿地方を中心として特に盛んである。

地蔵盆の前後には、地蔵の据えられる家や祠の周囲などに、地蔵盆独特の提灯が多く飾られる。京都では子どもが生まれると、その子の名前を書いた提灯を奉納する風習がある。提灯の色はおおむね女子は赤、男子は白で、その子が地蔵盆に参加しているあいだは、毎年飾られる。今では、地蔵盆は子ども達のための祭りであると言える。

地蔵盆では、地域によってもさまざまだが、おおむね次のような行事が行われる。

一、僧侶による読経や法話（子ども達に向けたものであるものが多い）

二、「数珠回し」。これは、町内の子どもが、直径一、二メートルくらい大きな数珠を回すですわり、僧侶の読経にあわせて順々にまわすというものである。

三、地蔵に詣った子ども達に、供養の菓子や手料理などをふるまう。

四、地域の子とも達が一堂に会するため、子ども達に向けたイベントが行われる。

五、地蔵盆の場が、そのまま子ども達の遊び場となることも多い。

少し前までは、初日朝に地蔵盆の用意をし、僧侶による読経、子ども達におやつ（日）の配布、夜のイベント（踊りや花火、すいか割り、野外映画上映など）。翌日には、おやつ配布、お供えのお下がりの配布、後片付けといった流れが多かった。

しかし、子どもが少なくなったことや、大人たちの都合が付きにくくなったりすることから、一日で終えてしまう町内も増えつつある。



わらべ地蔵

(四ノ宮・徳林庵前)

なお、町内によっては「天道大日如来」が祀られていて、それらの町内では大日如来の縁日である旧暦七月二十八日もしくは、それ前後に「大日盆」を行うことがあるが、今日では内容的には「地蔵盆」とほとんど変わりのないものとなっている。

②山科のお地蔵さん

山科区内のお地蔵さんがどの場所に祀られているかについては、ふるさとの会地蔵調査部会による詳細な調査がある。それによれば、山科区内全域で約六三〇カ所が確認されている。

むろん、カ所に数体のお地蔵さんが祀られている所も多く、全体で軽く二五〇〇体を超えているし、京都市内の洛中と比べても遜色がない。これだけ多くのお地蔵さんが祀られている背景には、長い年月にわたってこの地で地蔵信仰が続いてきたことがあげられる。

その殆どは無名の地蔵尊であるが、中には、「母子地蔵」(安朱)、「鏡山地蔵」(御陵)、「子安地蔵」(北花山)、「弁天地蔵」(北花山)、「おたつ地蔵」(西野)、「出世地蔵」(西野)、「子授け地蔵」(御陵)など、名前のつけられている地蔵尊もある。これらの地蔵尊は名前の由来があるものが多く、その物語が地域で語りつがれていることが多い。

また、山科北部・東部・西部の丘陵地帯では地蔵菩薩ではなくて、「大日如来」が多く祀られているが、これは古くからの山岳信仰に端を発していると思われる。北部の四ノ宮

地域には「行者谷」という地名があり、また西部の北花山地域には「大峰町」という地名も残る。また東部の大塚地域には「行者ヶ森」があり、現在も行者場となっているし、小山地域の音羽山中腹にある牛尾山法蔵寺では毎年四月一七日には山伏達による「大護摩供」が神仏混淆の行事として行われている。

しかし、「大日尊」を祀る日は一七日と一八日であるが、今日ほとんどの地域が「地蔵盆」として、八月二四日前後におまつりを実施している。

山科では、こうした信仰の歴史を背景に、山科各地には「お地蔵さん」が多く見られるものと思われる。

毎年八月二・三日・二三日には四ノ宮地域の徳林庵において、「六地蔵巡り」のである。「四ノ宮地蔵」の地蔵盆があり、一〇〇以上の夜店もでて山科におけるにぎやかな風物詩の、つととなっている。

(二) 山科の地蔵盆調査

山科に残る伝統文化行事の一つであり、現在においても地域のコミュニケーションやまちづくりにも大きな役割を果たしている「地蔵盆」。しかし、一方では子ども数の減少や運営の担い手が減少するなどの理由で地蔵盆を行っている所は少なくなっていると言われている。そうした時に、この伝統行事が現在、山科のいくつの地域でどのような形で継承されているのか、また地蔵盆が地域の中でどのような役割を果たしているのか

調査用紙

所で地蔵盆が行われているだろうと推測した。仮に全体を二〇カ所とすると、調査率は約九五％程度である。こうした調査結果をもとに、ここでは主に地蔵盆にあらわれている地域のコミュニケーションと、地域の教育力や子ども達の発達との関わりについて考察してみたい。

ふるさとの会 地蔵盆調査用紙

開催町内・開催場所(学区名)

(町名)

開催番号

行事名	地蔵盆 大日盆 夏まつり 子どもまつり その他
開催場所	公園内 路上 屋内 屋内型ガレージ内 屋外型ガレージ内 空き地 その他
開催日時	開始 月 日 () 午前・午後 時 終了 月 日 () 午前・午後 時
主催団体	町内会や自治会 子ども会 有志 その他
参加人数(概略)	(大人 名・子ども 名) 合計 名
行事 (プログラム)	住職読経 住職説教 競珠まわし おやつ配付 飲物配付 福引き(子ども) 福引き(大人) ふこ落とし ゲーム(子ども) ゲーム(大人) 昼食 夕食 大人懇親会 上映会 盆踊り カラオケ 夜店 その他
まつられるお地蔵さん	石仏 石仏外 () 体数 () 体 ふたんまつられている場所 ()
お地蔵さん	化粧(あり・なし) 飾り(あり・なし) お花(あり・なし) お供え物(あり・なし)
提灯・行灯	提灯(あり・なし) 行灯(あり・なし) その他の飾りもの(あり・なし)
地蔵盆の歴史 (いつ頃から)	

※地区・学年・プログラム等は調査に基き添付してください。

連絡先

(名前)

等を調査して記録に残し、その結果を山科区民に返していくことで地域づくりにも大きな貢献ができると思う。

こうした位置づけのもと、平成二四年と二五年の八月に、ふるさとの会では山科区内を対象に「地蔵盆調査」を実施した。各地の地蔵盆が、いつ、どこで行われているのかについての一欄というものは全くないので、まさに「歩いて」「見つけて」「飛び込んでいって」調査をするというもので、調査には困難を極めたが、それでも二九カ所の地蔵盆について調査をまとめることができた。調べられていない所もあるために、今回の調査をもとに山科では約二数十カ

(三) 山科で行われている地藏盆



写真を祀る地藏盆

(西野山団地)

地藏盆の主催者で、圧倒的に多いのは自治会（町内会）である。自治会本体が主催者である場合が多いが、子供会、地藏盆実行委員会などの名前で実施される地域もある。また、わずかにはなってきたが、お地藏さんを所有している家とその周辺の家で地藏盆を実施している地域もある。また、西野の旧村落地域のように子どもの人数が減少してきた所では、お地藏さんはあるものの地藏盆は実施されない地域もあるし、反対に山科団地各棟自治会のように、マンションや団地などでは、新たにお地藏さんを祀って地藏盆を実施し出した地域もある。その他、新興住宅地域には、その時だけお地藏さんをお寺などから借り受けて地藏盆を実施する地域もある。

祀られるお地藏さん（あるいは大日如来）は、ほとんどが石仏であるが、中には、音羽前山町のように陶器の祠を持つお地藏さんがあったり、東御坊（貞宗大谷派長福寺）では、「掛け軸」に描かれているお地藏さんを飾って地藏盆を実施している所もある。西野樫川町では、紙にお地藏さんを描いてそれを祀って地藏盆をする。

地藏盆の時、祀られるお地藏さんの顔には、お化粧がほどこされる場合が多い。このお化粧を誰がするのだが、ほとんどは町内役員がしているところが多い。ただ、「妊婦さんがお地藏さんのお化粧をすると、安産で子ども健康やかに育つ」と言われており、妊婦さんがしている所もある（御陵四丁野町）。また、昔は子どもにお地藏さんのお化粧をさせている所もあったというが、今日ではそれはほとんど見られない。だいたい顔のみをお化



粧することが多いが、西野樺木町のお地藏さんのように、体全体がお化粧されている地藏も見られる。

お地藏さんの「前掛け」（「よだれかけ」とも言われる）は、子どもの安全と健やかな成長を願って奉納されるものであるが、ほとんどが白地の前掛けで子どもの名前が記されている場合が多い。ただ、赤地の前掛けや、竹鼻立原町では町内のほとんどの地藏尊が二体で一体は赤、一体は白となっているのもめずらしい。

（四）地藏盆の内容

地藏盆の日程は、もともとは二日間であったが、最近では一日で終わらせてしまう所も多い。行事はプログラムで示してあり、おおよその内容をつかむことができる。以下、東野地域を例にいくつかをあげてみると、この地域はほぼ一日で終わっているが、一部南西部（山階南学区西ブロック）地域では二日に九町内合同の「盆踊り」が行われている。

こうしたプログラムで気がつく点は、少なくとも地域で「お寺さんのお参り」「数珠廻し」「福引き」などの伝統的な行事が継承されていると共に、新しく「ビンゴゲーム」「スーパールールすくい」「ヨーヨー釣り」「カラオケ大会」など、子ども達が喜びそうな行事がふんだんに盛り込まれている点である。

さらに、子ども達の大好きな「マクドナルド」「たこせん」「ジュース」「アイスクリーム」「かき氷」、など、昼食・おやつ時間がたくさんあり、同時に大人たちのビアガー



音羽草田町

（光照寺ご住職のお話）

デンや「夕涼み会」「親睦会」が企画されているなど、子どもだけでなく地域の大人にとっても重要な交流の場になっている点は見逃せないと思う。また、ひとつの町内では企画しにくい「盆踊り」を九町内合同で実施しているのも地域の力を感じさせてくれる。

さらにそうした行事の中で、「言葉集めゲーム」「交通教室」「地蔵盆の由来についての話」（西野山科団地A・B棟自治会）、子どもによる「あんどん絵描き」（日ノ岡第一南部町内会）、「工作」（厨子奥北部町内会）、「体験コーナー（手づくりうちわ）」（山科団地A・B棟）など、子どもへの教育的側面を配慮した企画がされている町内があることも重要である。

（五）地蔵盆の中での子ども達

*読経

多くの地蔵盆では、お坊さんによる「お参り」が行われる。山科では八、%の地蔵盆でこうした風景が見られた。子ども達はその読経を聞きながら、お坊さんの後にきちんと座って「神妙に」聞いている。普通公立学校で、このような宗教的な場に接する機会はほとんどないと言って良いから、子ども達にとっては貴重な機会かも知れない。

むしろ意味が解ってしているわけではないが、廻りの大人達の様子や、「静かにしなさい！」などの叱責を受けて、このような場面でのような対応を取れば良いのかを体得していくのだろう。意味の解らない子どもに、こうした宗教的な場が強制されて良いのか、

し 厨子奥公会堂での数珠廻



適切であるかどうかは分からないが、地域の伝統を子ども達に継承していくという点では役に立つと言えるだろう。

* 数珠廻し

お坊さんの読経に合わせて、子ども達が「数珠廻し」を行っている姿は、最近では少なくなつたが、それでも山科区内で三割程度（三二％）の地蔵盆で行われている。読経はお坊さんの生の声の場合もあるし、テープに吹き込んだ場合もある。また、数珠廻しも子ども達だけで行う地域や、大人と子どもがいつしよになつて行っている所もある。また、数珠も明治以来の伝統を持つもの（厨子奥北部）や、最近新たに新調されたもの（安朱北部）もある。将棋の駒のような番号札があつて、それで数珠が何回回つたか数える。地域によつても差があるが、だいたい三〇〜四〇分ぐらい続けられるのが普通である。

* お坊さんのお話しや紙芝居

読経や数珠廻しの後、お坊さんによる「お説教」（お話し）が行われる所もある。また鏡山東部のようにお話しに代えて、お坊さん白らが「紙芝居」をされる所もある。山科のお寺は、附属で幼稚園や保育園を持っている所も多いから、概してお坊さんの話は子ども向けでわかりやすい。子ども達も集中して聞いている。話や紙芝居の内容は千差万別だが、いずれも教訓的な物語が多い。しかし、最近では地蔵盆の「お参り」をいくつも兼ねて持っておられるご住職も多く、お話しが省略されることも多い。十数カ所をタイムスケジュールで廻られる方もおられる。



* おやつ

おやつへの配付は子ども達の最大の楽しみである。配られるものも、お菓子の詰め合わせ袋から、「マクドナルド」「たこせん」「ポテトチップス」「ドーナツ」「ポップコーン」「ジュース」「アイスクリーム」「かき氷」「すいか」など様々である。「〇時におやつ（〇〇）を配ります」とプログラムに書いてあれば、その時だけは家に帰っている子どもも地蔵盆の会場へ来ておやつをもらう。次の行事の時間まで、家に帰る子どももいるが、中にはおやつを食べながら会場に残って子ども達同士でいろいろと遊ぶ姿も多く見受けられた。

また、単なる配付だけではなく、別に屋台で店を出してショッピング風になっている所もある（音羽下本町、東野竹田公園等）。東野竹田公園で行われる合同盆踊り大会会場には、「おもちゃ当て物、金魚すくい、綿菓子、風船、いか焼き、フランクフルト、かき氷、焼き鳥、ヨーヨー釣り」などの模擬店が並ぶが、大人も子どもも楽しめるように工夫がされている。

* ゲーム・遊び

ゲームや遊びにはいろいろな多彩ものが用意されている。

一番多いのはやはり「福引き」（東野・東野舞台台中・東野森野・東野竹田・東野舞台北・東野竹田南・東野八代北・西野山科団地A B棟・日ノ岡第一南部・西野樫川・西野大島井第二・西野大島井第二）で、続いて、よく似た「ビンゴゲーム」（東野・東野森野・東



小金塚第二町内会地藏盆

野竹田・東野舞台北・東野竹田南・東野八代北・西野山科団地A・B棟・日ノ岡第二南部・日ノ岡第一南部・西野櫛川）が行われている。最近特に各地で「ビンゴゲーム」がはやるのは、やはり参加の容易さと、景品の魅力にあるのだろう。

それから、「スーパーボールすくい」（東野・東野舞台中・東野舞台北・東野舞台北・東野八代北・日ノ岡第二南部）、「ヨーヨーつり」（東野舞台中・東野舞台北・東野舞台北・東野竹田南・日ノ岡第二南部・西野櫛川・西野大鳥井第一）などが続く。昔の恒例であった「すいか割り」（日ノ岡第一南部）や「金魚すくい」（西野櫛川）、「花火」（日ノ岡第二南部）などは、一部では行われているものの、すっかり影をひそめてしまった。これは、場所の問題やその後の処理などがだんだんと難しくなってきたからだろう。

その他、ユニークなものには、「言葉集め」（東野）、「ストラックアウト」（東野舞台北）、「サッカーゲーム」（東野八代北）、「カラオケ」（東野八代北）、「マジックショー」（西野山科団地A・B棟）、「体験コーナー（手づくりうちわ）」（西野山科団地A・B棟）、「ビデオ観賞」（西野山科団地A・B棟）、「宝さがしゲーム」（日ノ岡第一南部）、「紙芝居」（西野櫛川）、「お菓子つかみ取り」（西野大鳥井第二）、「工作」（西野大鳥井第一）などがある。いずれも役員さんや町内の意向が伺えるようで興味深い。

（注・ゲームや遊びの内容は毎年変化する場合も多いので、ここに記載した町内が必ずしも毎年行っている訳ではないことを付記しておく。）



*** 行灯**

行灯は、地藏盆の入口に大きく掲げるものと、子ども達一人一人につくらせているものがあり、また行灯の代わりに子ども達が書いた絵を会場内に展示している所（音羽初田）もあった。

伝統的には子どもに絵を描かす事が多く、山科でもそうした行灯が多く見られる。大きなものは大人が描いたものもある。日ノ岡第一南部町内会では、わざわざ「あんどん絵描き」の時間を取って、地藏盆に参加した子どもに描かせる時間をとっている。

*** 盆踊り**

夏の地藏盆に浴衣姿で盆踊りに参加するのは風物詩となっているが、山科でもさすがに「盆踊り」をする地域は少なくなった。しかし、数は少なくなったが地域の努力で続けられている所もある。すでに紹介したように東野南西部（西ブロック）では、九つの町内が合同で盆踊りを実施して、屋台も出しているが、その他厨子奥北部では四町内合同で盆踊りを実施している所もある。

ただ、山科では従来の主流であった「江州音頭」などを踊れる人が少なくなり、せっかく会場を設定しても、皆が楽しめないこともあるようで、都はるみが歌う「山科音頭」の普及など、踊りの指導も大事であるという話を聞いた。また、現代風にアレンジしたダンスがこれに代わっているところもある。



*** 提灯や飾り物やがもたらす「地藏盆風景」**

お地藏さんにお化粧をして、真新しい「前掛け」をつけ、花や供物、提灯などで飾るのは、どの地藏盆でも同じであるが、少しずつその特徴もある。例えば、提灯についても京都府南部では「南無地藏大菩薩」と書かれることが多いのに対し、京都市内では「延命地藏大菩薩」と書かれることが多いと聞く。この山科では地域によって「南無地藏大菩薩」（髭茶屋地域）、「延命地藏大菩薩」（厨子奥地域）など、混在が見られるが、いずれも子どもの名前を記されており、子ども達の健やかな成長を願って掲げられていることに違いはない。また、髭茶屋地域では、提灯の代わりに青竹に赤白の「幟（のぼり）」を掲げて「南無地藏大菩薩」と書かれているのは、提灯以前の風習が残っているのかも知れないし、福井県の若狭地方でも現在もそういった風習があるというので、そうした影響を受けている可能性もある。

髭茶屋町地藏盆

（幟は提灯が飾られる以て心に残っていくだろうし、そうした場の経験は、子どもの成長にとって貴重なものであると言えるだろう。）

（六）大人と子どもの「ふれあいの場」

*** 大人と子どもとの「ふれあいの場」**

また、地藏盆は、貴重な大人と子どもの「ふれあいの場」でもある。



髭茶屋町の地藏盆では子ども達と共に「交通安全」の看板を書き、町内道路端に一年間掲げる。

子どもが大人と接して「うれしい」と感じるのは、「褒められる」「認めてくれる」「サポートしてくれる」「話を聴いてくれる」といったときで、反対に「納得がいけないこと」は、「話を聴いてくれない」「一方的な行為」「大人にとっての都合のいい使い分け」「不公平な扱い」「比較される」といった時である。また、おとなの「マナー・ルール違反」「モラルの低下」に対する批判の目も厳しい。最近では、おとなの全体的イメージについても、プラスイメージより、犯罪や子どもへの暴力、自己中心性などのマイナスイメージが強くなっている。

このような子どもたちのまっとうな批判の声に、おとなは真摯に向き合っていかななくてはならないし、大人白らが、弱さや未熟さをも合わせ持った存在として、子どもと共におとなも成長しようとするようなあり方が求められている。しかし、現実には、何よりも「大人と子ども」が接する時間そのものが少ないし、家族でもそうであるのに、地域であればなおさらである。そうした点で、この地藏盆の機会は、子ども達が「手際よく」あるいは「かいいいしく」働いている大人の姿を目にする機会でもあるし、「子どもと遊んでくれる大人」に接する機会でもある。こうした人間的な接触は、子どもへの人間に対する信頼を広げるし、地藏盆そのものの本来の理念からして、大人は子どもに対して「地藏菩薩の心」で接することを求められるから、そうした信頼関係を構築するまたとない機会ともなっているのである。

こうした「生」の人間接触は子ども達の願いに応えることにもなるであろう。



＊大人同士の交流の深まり

地蔵盆はまた、地域の大人同士も結びつけている。多くの地蔵盆では、子ども対象の行事と共に、「町内会親睦の場」（東野舞台町中部）、「夕涼み会」（東野森野町第一）、「町内親睦会」（東野竹田北）、「大人カラオケ」（東野八代北）、「反省会」（厨子奥北部町内会）など、大人の親睦を図る行事も多くの地域で組み込まれている。「子どものための」地蔵盆は、また、そのために集まる大人同士を結びつけているのである。

このことは「地域づくり」を進める上できわめて大事な点であると思う。今日、山科でも自治会・町内会への未加入者が増えるとか、自治会・町内会そのものもない地域が生まれるとか、また、自治会・町内会自身の活動が低迷するなどの事態が生じている。しかし、そんな中でも「地蔵盆」や「山科まつり」などは伝統に支えられ、山科各地で続けられている。「地蔵盆が年中最大の行事」という自治会・町内会も少なくない。そんな中で、地蔵盆は地域住民の交流を図り、絆を深める重要な場となっているのである。

＊「地域」をめぐる変化

山科は、五〇年ほど前までは近郊農村であったが、一九五〇年代の末頃から無計画な開発によって急速に宅地化が進んだ地域である。山科団地・清水焼団地など一部計画的な開発が行われた地域もあるが、それ以外の多くの地域では小規模の新興住宅地が農村・農家と混在しながら拡大していった、いわば「虫食い状開発」であった。そして、サラリーマン・公務員など、新しく転居してきた住民（ここでは仮に「新住民」と呼ぶ）と、古くから山科に住み、農家を主体とする住民（ここでは仮に「旧住民」と呼ぶ）の混住化社会が

形成されることによって、新・旧住民の間で生活意識・地域に関する考え方など、多くの断絶や対立が生じた。



音羽市営住宅地蔵盆

（「地蔵盆」だがお地蔵さんは祀らない）

日本社会は、第二次世界大戦以前は約五割が農業を中心とする第一次産業に従事していたが、戦後の経済発展に伴ってその割合は急速に低下し、第一次・第二次産業従事者の割合が急増してきた。第三次産業は一九七〇年代半ばには五割を超え、伸び率は小さくなってきたもののその後も増え続けている。都市人口の割合も、経済の成長や産業化の進展に伴って増加し、一九七〇年代半ばには全人口の四分の三が都市部に住むようになったという。

こうした変化は次の二つのことを引き起こした。第一は、生活景観の変化である。あらゆる産業の中で農林業がもつとも広い空間（土地）を必要とするが、その割合が大幅に減少したということは、同時に日常生活世界から農村的景観・農村的生活様式が消えていったということである。第二は、第一次・第二次産業従事者の多くは勤労者（サラリーマン）であり、その主要な職場は工場やオフィスの中だということである。その結果、働いている職場と、生活している地域とが分離されるという事態を引き起こした点である。分離されたのは、単なる「場所」だけの問題ではない。同時に労働、生活という「時間」もまた明瞭に分割されることになった。勤労者（サラリーマン）にとつての「住んでいる所」というのは、単なる自宅のある「場所」に過ぎなくなり、主要な関心は、職場と家庭にあつて、この結果、衰退していったのは「地域」である。

「新住民」の生活は、都心や市街地にある職場と郊外の家庭を空間的にも時間的にも完全に切り離した「職住分離」の生活である。その結果、家庭生活以外の地域のことにはあ

まり関心を持たない私生活重視の「マイホーム型」のライフスタイルが主流となった。しかし一方、地元で農業に従事してきた「旧住民」は、農業生産が共同体的な地域管理を必要とするだけに、共同生活を重視する「共同体型」のライフスタイルが主流であったが、山科においては、土地を手放す、別の産業に転換するなど、「共同体型」そのものも衰退の途をたどることとなる。

こうした「断絶」と生活意識の変化は、全体として地域に必要な「コミュニティの場」を消失させ、「地域住民の合意形成」において深刻な障害を生じることとなった。それ故、劣悪な生活環境に対しても、住民が共同して自らの要求を主張するという形ではなく、私的な、個人的な対応をよぎなくされることとなっている。

* 山科の「まちづくり」

山科の人口が急増した頃、日本は世界的にも稀な高度成長期で、それに伴い山科も「成長期」として、急激な変貌をとげた。都市の経済活動（職場）の拡大に伴なって都市圏が拡大、山科でも宅地化がどんどん進んだ。一九五五年から一九八〇年までの二五年間に山科の人口は約四万人から一四万人に増えるという、未曾有の大量流入であった。

山科におけるこの時期の主要な課題は、増え続ける人口に対して、道路・上下水道・公園・学校・保育所などの都市インフラ整備などが追いつかなかった点である。そこで、「ハコモノ不足」を解消するために住民は生活不便の解消を求めて陳情を繰り返すか、あるいは後追いの運動をするかの受身的状況に置かれることが多かった。

しかし、一九八〇年頃になると、人口は約一四万人で頭打ち状態になり、以後人口は横ば

い状態になる。山科地域の環境悪化と地価高騰に伴って、さらなる郊外への人口流出が始まり、人口増加に歯止めがかかったのである。ある意味「成熟期」にさしかかったと言え、もはやこれ以上の町としての成長拡大は期待できなくなる。しかし、都市インフラ整備の課題は、人口増加に対して常に遅れをとるため、その後二〇年近くは、多くの課題を抱え、一九九七年の地下鉄東西線開通、一九九八年の山科駅前再開発完成などをみて、応の終了段階に至る。

そして、二一世紀に入るあたりから、山科における主要な課題が変わってくるようになる。それがいわゆる「インナーシティ問題」といわれる「まち」の経済・社会・環境の三位一体の衰退化である。都市の成長期においては、新しく増え続ける人口に対していかに早くそのインフラを整備するかが課題であったが、山科における「住宅の老朽化」「人口の高齢化」「格差と貧困の広がり」などともあいまって、住民が住んでいる地域の生活・福祉・医療・コミュニティの崩壊をどう防ぐのが、主たる課題になってきている。つまり課題が量的な「ハコモノ不足」から質的な「ナカミの衰退」に移っているのである。

今後山科は、放置すれば、人口減少や区内での各地域の格差拡大、ダウンタウン化する地域が出る「虫食い状衰退」などによって「衰退期」を迎えることになるだろう。しかし住民の「まちづくり」の努力いかんによっては、「中興期」に発展させることも可能である。



* 地域社会のコミュニティ

「衰退期」と「中興期」の分岐点は、「住民が安心して住み続けられるかどうか」ということである。住み続けられる条件とはいったい何かと言えば、「職住遊学」、つまり「働く・住む・遊ぶ・学ぶ」という都市生活の四条件がバランスよく満たされている「まち」ということである。別の言葉で言えば、健康で文化的な生活を営めること、子どもを安心して産み育てられること、そして健やかな老後を過ごせることである。

これからの「まちづくり」は、地域のコミュニティに基盤を持たない運動では、本来の運動たり得ない。「まちづくり」を通して「地域のコミュニティ」づくりをし、「地域のコミュニティ」づくりを通して「まちづくり」を推進していく必要がある。

コミュニティの場としては、地域の自治連合会や町内会・自治会はこれからも依然として地域コミュニティを担う中心的存在であり続けるだろう。人間が集まって共に住むという生活が続く限り、ふだんの挨拶や親睦活動、地域福祉、ゴミの処理など地域美化、防犯・防災など緊急時の助け合い等々、地域の共同生活を支える地縁的住民組織の存在意義が減ることはないからである。

そして、それとともに、高齢化社会の到来、団塊世代の退職などによって、住む場所での生活の比重や重要性が時間的・内容的にもこれまでとは比較にならないほど大きくなりつつある現在、コミュニティの場としての多様な形態の存在も重視する必要がある。地域での自主的団体の多様なサークル活動、ボランティア活動、NPO活動などが充実すればするほど、豊かな地域コミュニティが生れることは間違いない。

これら地域におけるコミュニティの場の形成と、多様なネットワークを形成すること。

ここに、これからの「まちづくり」発展の契機と展望が潜んでいるのではないかと考える。そうした中で、「地蔵盆」という行事は、地域のコミュニティを形成していく重要な場であり、また出発点ともなっているのである。

私たちの取り組みに求められているのは、身近な地域の中で、子どもたちの意見を生かした発達・成長の場を、住民と共に如何に構築していくのかということである。例えば、子どもの遊び場やたまり場をつくっていく取り組みを進め、もつと子どもがその計画段階から参加し、「つくる」活動の担い手となっていくこと、子どもたちの話し合いをリードし、仲間の声と力を集めて、日々の遊びや行事をつくっていく試みなどを広げていくことが大切となっている。そうした場としても、地域で行われている「地蔵盆」は貴重な機会であると言えるだろう。

私たちふるさとの会（正式名称は、「ふるさとの良さを活かしたまちづくりを進める会」）が、山科の「地蔵盆」に注目して、調査やその活性化に向けて取り組んでいるのも、そうした「まちづくり」の「環」の中で、伝統ある「地蔵盆」が重要な役割を果たしていると考えているからである。

“京都をつなぐ無形文化遺産”
「地蔵盆（仮称）」選定イメージ

【選定にあたって】

＜地蔵盆の歴史＞

- ・江戸時代以降の急速な広がり
- ・地蔵信仰と地蔵盆
- ・

＜地蔵盆はいま＞

- ・京都，関西を中心に広域に分布
- ・京都市内の約8割の地域で実施
- ・

＜地蔵盆の意義・役割＞

- ・町内安全や子どもの健全育成の願い
- ・地域コミュニティの活性化
- ・

＜地蔵盆の課題＞

- ・子どもの減少
- ・価値観の多様化
- ・

【地蔵盆について】

＜地蔵盆の行事例＞

- ・僧侶の読経
- ・数珠回し
- ・福引
- ・

＜その他＞

・

地蔵盆の衰退？



平安時代に盛んになった地蔵信仰は江戸時代には地蔵盆として全国的に行われていた。明治政府の廃仏毀釈を受け、明治50年の地蔵盆禁止令により、町内からお地蔵さんが消えた。その後、明治後半から時間をかけ復活した。第二に、次世代大衆で地蔵盆の盛況がなくなり、戦後以前にも増して盛んに行われ、現代に引き継がれた。このように地蔵盆はその時代の人々の思いを盛り込んで再生し、伝承されてきた。

地蔵盆はいつあるの？



かつては町内の夏の最大イベントとして8月23日前後の2日間開催されてきた。しかし、他の祭りと同様、その前後の土、日曜日に要する町内が遠くまで、西津地区では西津線の線内休みにあわせて昔から14日～16日に開催されてきた。今回の調査で、成道学区では15日のお盆からその次の週末まで、町内の準備で開催されています。この1週間は、学区の各町内で地蔵盆を体験することが出来ます。

地蔵盆はどんな場所ですか？

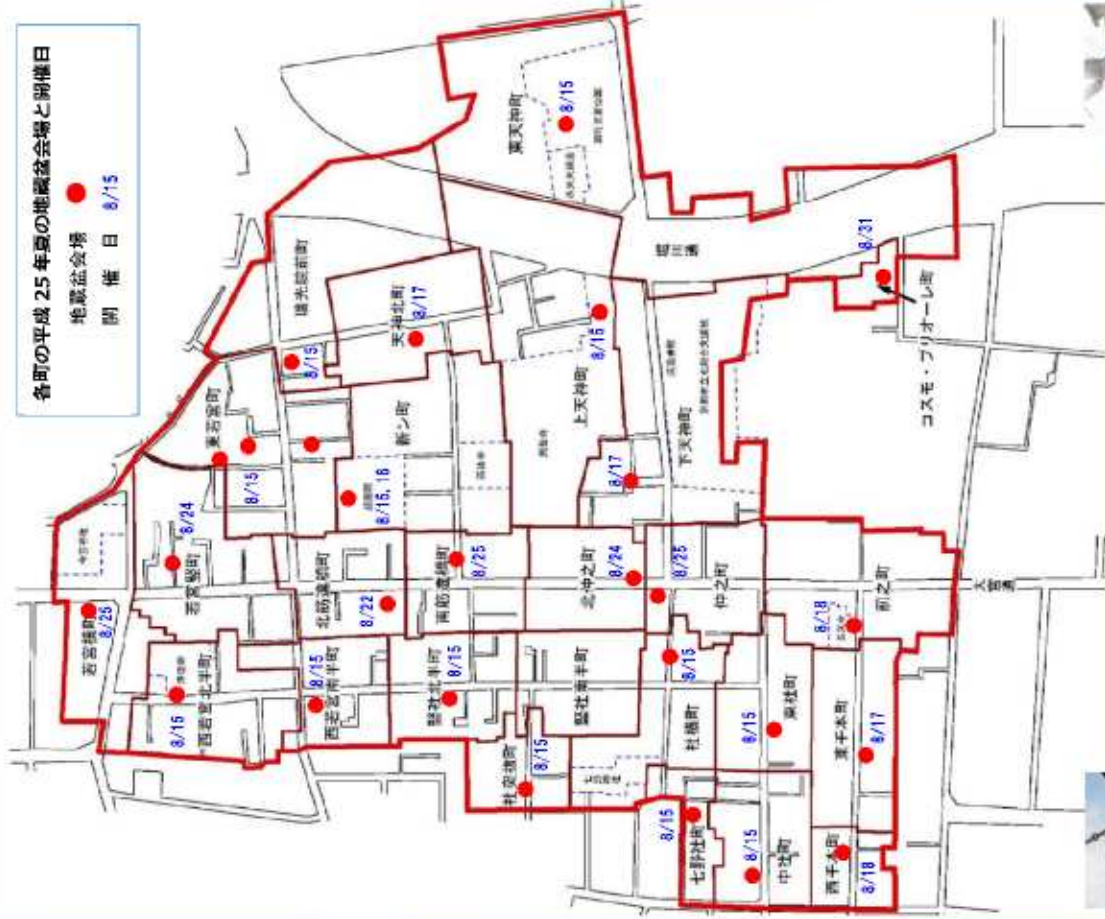


これまで「地蔵盆を安置したお家の軒下」での地蔵盆が普通の光景でしたが、最近は道路事情や町内の事情で様々な場所で開催されています。町内のお宅の持ち回りや、児童公園、お寺の境内など様々です。お地蔵さんも通常は近くのお寺に預け、地蔵盆の時に町内で飾る町内もあります。市内では地蔵盆開催の時だけ、土を「町内通行止」にするところもあります。会場確保には地域のみなさんのご理解が大切です。

成逸の「地蔵盆」をご紹介します

各町の平成25年度地蔵盆会場と開催日

● 地蔵盆会場
● 開催日 8/15



成道学区では8月のお盆15日から下旬の間に、各町内で地蔵盆が開催されています。各町内では朝から準備が進められ、お寺の住職さんの読経、教誹り、そして子どもたちを中心のゲームや福引など楽しい行事が1日続けられています。どうぞ、成道の夏の風物詩の「地蔵盆」をご覧いただき、ご参加いただき、地域の絆を深めてください。

地蔵盆はどんなことをするの？



最近ではほとんどが1日の開催です。お寺のご住職のお説教から始まり、読経とあわせて数珠回しをする町内が多く見られます。その後、ゲーム、おやつ配り、福引等をします。子どもを驚かすため、金魚すくい、すいか割り、ヨーヨー釣り、輪投げ、ビンゴゲームなど多様です。福引は子どもと大人の2つがあります。町内に住むのは大人と子どもの割合が多いため、大人と子どもの交流の場として、大人と子どもの交流の場にもなっています。

地蔵盆の世話はだれがするの？



成道学区の地蔵盆はすべて町内会が主体の開催です。担当役員の方々が世話をします。持ち回りの町内会もあります。最近戸建て住宅が増加した町内会では若い両親が手伝う姿が印象的です。お母さんは月曜から近所づきあいやPTAなどを通じて地域ともつながりがありますが、あまの地蔵盆は「地域の子」の親好の場になっています。これからは若い人の参加が期待されます。

地蔵盆の将来は？



どの町内でも少子化と高齢化で、1日だけの開催になっています。町内に子どもがいなくてお年寄りだけで数珠回しをする町内も見られます。最近では参加者が減り、たとえたとえする町内も減っています。外県にもおやつを配る町内も多く見られます。地蔵盆は年齢を超えた子ども同士の楽しい交流の場とともに、町内のみなさんの寂しい安否確認の場です。これからお町内の大切で年中行事として受け継がれることが望まれます。

地蔵盆はお町内の絆の原点で、お町内の年中最大行事として伝承されています。



地蔵盆は

○子どもが自由に遊ぶ「晴」、遊べる「場」があり、一緒に遊ぶ仲間がいます。

○幼児から小学生まで、年齢を超えて遊び、交流する貴重な場があります。

○ご近所の子ども、ご近所のおじさん、おばさんと、子どもと大人が安心して交流する場です。

○ご近所の大人の交流の場であり、日常のご挨拶、声かけにつながります。

○さまざまな世代、古くからの人、新しい人が自然に集まり、出会い、楽しみ、交流する場です。

「地蔵盆」はご近所つきあい、お町内づきあいの拠点です。

地蔵盆を通じて、お町内の顔の見える安心感が生まれ、ここよいまちづくりにつながります。

京都市は町衆の夏の風物詩『地蔵盆』を、「京都をつなぐ無形文化遺産」としての登録をめざしています。成逸住民福祉協議会においても成逸の夏の風物詩として、成逸ならではの伝統として、お町内のみなさんと一緒に継承してまいります。

◆成逸学区では「私のまちに町内会があってもよかったと思えるまちづくり」をテーマに活動しています。白旗から地蔵のみなさんの交流を深め、みんなで支えあうここよいまちづくりをめざします。

成逸の夏の風物詩「地蔵盆」の記憶

成逸学区のすべてのお町内で、子どもから大人までが楽しみ、交流し、地域の絆を深める「地蔵盆」が毎年、お町内のみなさんの手で伝承されています。



【平成 26 年 3 月】 成逸の夏の風物詩「地蔵盆」の記憶

【発行】 成逸住民福祉協議会 【企画編集協力】 京・まち・ねっと

成逸住民福祉協議会

“京都をつなぐ無形文化遺産”

「京の食文化－大切にしたい心，受け継ぎたい知恵と味」

平成 2 5 年 1 0 月

京都市

選定にあたって・・・・・・・・・・・・・・・・	1
「京の食文化」が育まれた背景・・・・・・・・	3
「京の食文化」が持つ特質・・・・・・・・	3
「京の食文化」の具体的内容・・・・・・・・	4
暮らしが育む食文化・・・・・・・・	4
暮らしを支える食文化・・・・・・・・	6
暮らしを彩る食文化・・・・・・・・	7
もてなしの食文化・・・・・・・・	7

【 選 定 に あ た っ て 】

三方を緑豊かな山々に囲まれ、鴨川をはじめとする清流の恵みを受けながら、鮮やかに季節が移ろう京都は、平安京遷都以来、千有余年の永きにわたり都が置かれ、日本の政治、文化、宗教の中心地として栄えてきた。その中で、人々は暮らしの営みを積み重ね、公家、武家、僧侶などとの文化的なかかわりから、その行事やしきたりが日常の生活に定着するなど、多様な文化の影響を受けながら、食文化をはじめ地域ごとに豊かな京都の町衆文化を育んできた。

良質の水と肥沃な土壌に恵まれ、自然との共生を大切にしてきた京都は、消費地である都市部と生産地である農村部が近接し、食を通じた循環を作り出してきた。その中で、仏教思想とも相まって、野菜を中心とした食文化を育むとともに、都であった京都には、琵琶湖や近海だけでなく遠く北海などから水産物が運ばれ、海から離れていたことが製造技術や調理法に創意工夫をもたらし、京都の食文化を発展させた。

また、全国から多様な文化が流入し、茶の湯や生け花をはじめとする生活文化が京都で栄えたことに加え、漆器や陶磁器、木竹工芸品等の生産が発達していたことから、季節感やおもてなしの心、本物へのこだわりといった精神文化が京都の食文化にも浸透していった。

こうした食文化の歴史を持つ京都において、人々は、食に対して、「いただきます」「ごちそうさま」といった、自然や命、食に関わる人への感謝、「もったいない」という気持ち、食材を無駄なく大切に使う「始末する」心を持ち、本物・本質へのこだわりを忘れず、おもいやりとおもてなしの心で、知恵と創意工夫を凝らしながら、季節感を大切にして料理を作り、それを五感で味わってきた。

京都における食は、ご飯を主食としつつ、旬の野菜を中心に乾物や大豆加工品、漬物などの副食を上手に組み合わせた一汁三菜が基本であり、食材の持ち味を引き出す出汁（だし）をベースにした健康的なものとなっている。

京都の食文化の根底にある家庭の食卓には、代々受け継がれてきたおかず、いわゆる「おばんざい」を中心に、食生活に節目をつけるおきまり料理や暦や年中行事に合わせた行事食などが並んでいる。

今日の京都の台所を担っているのは、生産者の創意工夫により育まれてきた野菜、乾物や豆腐、湯葉、生麩などの加工品、漬物、棒だらや塩鯖などの塩干物や川魚、白味噌、うす口醤油などの調味料、そして、それらを提供する市場や商店街などである。また、京都から全国に広まったとされるお茶、名水と匠の技が育んできた清酒、年中行事や生活文化の中で発展し、茶の湯により一層磨きがかかった生菓子や干菓子などが食卓を飾り、彩りを添えている。

さらに、おもてなしの心は、洗練された技術と美意識をもとに、五色※₁、五味※₂、五法※₃を五感※₄で愉しむ京料理を作り上げるとともに、料理を盛る器や床の間、美術工芸品、庭園などのしつらえと併せて京料理を味わうことができる料理屋、商家や寺院、お茶屋などに料理を出前する独特の仕出し文化を生み出している。

今日、食を取り巻く自然環境が変化し、また、利便性を追求する風潮により、食に対する価値観が大きく変容している中、食を通じた家族のつながりの希薄化を含め食文化のあり様が問われている。この危機的な現状を踏まえ、食生活の原点である家庭での食事や学校給食などでの取組を更に広げ、京都の長い歴史の中で育まれた食文化を未来につなげていくスタートとして、「京の食文化―大切にしたい心、受け継ぎたい知恵と味」を“京都をつなぐ無形文化遺産”に選定する。

※₁ 五色…青，黄，赤，白，黒

※₂ 五味…甘味，酸味，塩味，苦味，うま味

※₃ 五法…切る，焼く，煮る，揚げる，蒸す

※₄ 五感…視覚，聴覚，臭覚，味覚，触覚

【「京の食文化」が育まれた背景】

- ◆自然と地理
 - 寒暖の差が大きい内陸盆地特有の気候であり、四季の移ろいが鮮やかである。
 - 鴨川をはじめとした清流や豊富な地下水などの良質の水と肥沃な土壌に恵まれ、自然との共生を大切にしてきた。
 - 消費地である都市部と生産地である農村部が食を通じた循環を作り出してきた。
 - 琵琶湖や近海の伊勢、若狭、瀬戸内だけでなく、北海や黒潮の水産物がはるばる運ばれてきた。
- ◆文化
 - 平安京遷都以来、千有余年の永きにわたり都が置かれ、日本の政治、文化、宗教の中心地として栄えてきた。
 - 公家、武家、僧侶などとの文化的なかかわりから、その行事やしきたりが日常生活に定着するなど、多様な文化の影響を受けながら、地域ごとに豊かな京都の町衆文化が育まれた。
 - 仏教思想とも相まって、野菜を中心とした食文化が高い生産技術にも支えられて発展し、海から離れていたことが製造技術や調理法に創意工夫をもたらした。
 - 茶の湯や生け花をはじめ多彩な生活文化が栄えたことに加え、漆器や陶磁器、木竹工芸品等の生産が発達していたことから、季節感やおもてなしの心、本物へのこだわりといった精神文化が京都の食文化に浸透した。

【「京の食文化」が持つ特質】

- ◆食への姿勢
 - 神仏とのかかわりの中で培われた、自然や命、食に関わる人への感謝「いただきます」「ごちそうさま」
 - 生活の中から生まれた、食材を無駄なく大切に使う心「始末」「もったいない」
 - 洗練された文化との触れ合いを通じ、町衆の暮らしの中で育まれた本物・本質へのこだわり
 - 四季折々の美しい自然の中で培われた季節感
 - 茶の湯や生け花といった生活文化によって育まれた「おもいやり」「おもてなし」、そして、その中で研ぎ澄まされた五感での味わい
- ◆食の特徴
 - 暮らしにメリハリをつけるハレとケの使い分け
 - ご飯を主食とした一汁三菜が基本
 - 旬の野菜を中心に乾物や大豆加工品、漬物などとの上手な組み合わせ
 - 食材の持ち味を引き出す出汁をベースに健康的
 - 悠久の歴史の中で洗練された、五色、五味、五法を五感で愉しむ料理

【「京の食文化」の具体的な内容】

以下の内容は、「京の食文化」の担い手である市民の皆様からの御意見により、今後に変化・成長していくものです。

新たな項目や具体例についての御意見をお願いします。

分野	項目	内容・特徴	(具体例)
暮らしが育む食文化	家庭のおかず いわゆる 「おばんざい」	京都で受け継がれている日常的な家庭料理。味付けは出汁をベースに、旬の野菜など季節の食材を無駄なく使いきるよう工夫された料理。 (京都の家庭では普通「おかず」と呼ばれている。「おばんざい」という言葉は、1964年に大村しげらが新聞のコラムで「おばんざい」という連載を始めてから、全国的に広がったもの。同じ或いは近い意味で使われてきた言葉として「おまわり」や「おぞよ」がある。)	(春) 菜の花のおひたし、若竹汁(煮)、たけのこ直かつお煮、ちりめん山椒、・・・ (夏) なすの田楽、にしんとなすの炊いたん、かぼちやの炊いたん、鱧ときゅうりの酢の物、・・・ (秋) 小芋の炊いたん、ずいきのごま酢和え、栗ご飯、きのこの炊き込みご飯、・・・ (冬) 水菜と油揚げのはりはり鍋、ふろふき大根、かぶら蒸し、・・・ (年中) ひじきと油揚げの炊いたん、高野豆腐の炊いたん、切干し大根の炊いたん、・・・
	おきまり料理	月のうちの「何の日に何を食べる」と決めることで、栄養の均衡を図りながら、食生活に節目をつけるという習慣が、商家を中心に生活の知恵として引き継がれてきた。	(1日) 小豆ごはん(家中がまめで暮らせるようにとの意味)、にしんと昆布の煮付け(にしんの渋みと昆布の語呂合わせから、渋う、こぼう(=儉約して)暮らしましょうという意味)、なます (8の付く日) あらめと油揚げの炊いたん(末広がりの8の日に、よい芽がでるように、病人がでないようにとの意味) (15日) 小豆ごはん、棒だらとえび芋の煮しめ、なます (月末) おから(調理に包丁がいらないことから別名「きらず」と呼ばれ、炒って食べることから、縁が切れないように、お金が入るようにとの意味)、・・・

分野	項目	内容・特徴	(具体例)
暮らしが育む食文化	行事食	無病息災や家内安全などの願いを込めて、暦や年中行事に合わせて作られる。社寺では、大根やかぼちゃなどの野菜を使って、供養や病除けの行事が行われている。	(正月) 白味噌丸餅雑煮、おせち(ごまめ、数の子、たたきごぼう、黒豆煮など)、(鏡開き) 鏡もちと水菜入りすまし汁、(七日正月) 七草がゆ、(小正月) あずき粥、(藪入り) ぜんざい、かしわのすき焼き、(節分) 塩いわし、(初午) 畑菜のからし和え、(ひな祭り) ばらずし、(春・彼岸) ぼた餅、(端午の節句) ちまき、かしわもち、(6月30日) 水無月、(祇園祭) はも料理、(お盆) ささげとなすのごま和え、あらめ炊き、かぼちゃの煮物、ずいきのなます、湯葉のつゆ、(秋・彼岸) おはぎ、(亥の子) 亥の子餅、(12月) 大根焚き、(冬至) かぼちゃの煮付、(大晦日) 年越しそば、・・・
	儀礼食	婚礼や還暦などの人生の節目に作られる。	お食い初め、祝い膳、・・・
	すし	海から離れた京都では、さばずしなど保存性の高い京都独自のすし文化が発展した。祭りなどハレの日のごちそうとしても欠かせない。	さばずし、鱧ずし、・・・
	麺類	禅宗とともに、僧侶から武士、そして庶民へと普及した。大衆化とともに多様化し、京都ならではのものも生まれている。	たぬき(あんかけきつねうどん)、にしんそば、・・・
	井物	地域ごとに豊かな食文化がある京都には、多忙な職人を中心に、井物も広まり、京都独特のものも生まれている。	衣笠井、・・・

分野	項目	内容・特徴	(具体例)
暮らしを支える食文化	野菜	寒暖の差が大きい特有の気候と良質の水、肥沃な土壌といった自然環境にも恵まれ、懐石や精進料理の広まりから、鮮度のよい、おいしい野菜への需要が高まる中、生産者の創意工夫により育まれてきた。	聖護院だいこん、すぐき菜、みず菜、壬生菜、畑菜、賀茂なす、えびいも、堀川ごぼう、桂うり、九条ねぎ、京せり、たけのこ、鷹峯とうがらし、・・・
	漬物	その歴史は古く、平安時代の書物にその名前が登場。塩漬けやぬか漬けなどの家庭の日常保存食として生まれ、底冷えといった漬物に適した気候にも支えられ、発酵によって生じる奥深いうまみを持つ漬物に発展した。	千枚漬、すぐき、しば漬、どぼ漬、菜の花漬、壬生菜漬、おこうこ、桂うりのみりん漬、・・・
	乾物や豆腐などの加工品	動物性たんぱく質を摂取しない禅宗の影響などから、豆やその加工品、乾物などが、大切な食品となった。	昆布、あらめ、ひじき、切干し大根、干柿、豆腐、湯葉、生麩、・・・
	塩干物や川魚などの魚	海が遠く、新鮮な魚に恵まれなかったため、手に入る魚をおいしく調理する技術が発達した。	棒だら、塩さば、ぐじ、はも(骨切り)、鮎、・・・
	味付け	出汁をベースに素材の持ち味や色合いを生かす味付け。煮物では、煮詰めず、余熱を利用して調味料の浸透を図る「うます」という調理法を特徴とする。	白味噌、うす口醤油、みりん、酢、・・・
	市場	日本で最初に開設された「中央卸売市場」や400年の歴史を持つ「錦」の他、市内各地にある地域密着型の商店街などが京都の食文化を支えている。また、農家が直接各家庭へ売りに回る「振り売り」も受け継がれている。	中央卸売市場、錦市場、・・・
	道具類	都であった京都には優秀な職人が集まり、伝統を築いてきた。	包丁、金網、・・・

分野	項目	内容・特徴	(具体例)
暮らしを彩る食文化	茶	京都の内外に優れた茶の産地を持ち、また、良質の水にも恵まれたことから、京都には茶の湯文化が発達した。江戸時代には煎茶が普及し、京都独特の茶の文化が日常生活に定着してきた。	抹茶、玉露、煎茶、ほうじ茶(京番茶)、かりがね、・・・
	和菓子	宮中や公家、社寺における行事や、もてなしと季節感を重んじる茶道の中で洗練されるなど、米や小豆、栗などの豊かな産地と良質の水にも恵まれながら、多彩な発展をとげた。	はなびら餅、椿餅、ひちぎり、花見だんご、ちまき、水無月、あんころ餅、葛きり、月見だんご、栗ようかん、亥の子餅、・・・
	清酒	良質の地下水に恵まれ、平安京が造営された頃から酒づくりが始まったとされる。江戸時代に伏見港が整備されてからは、伏見を中心に洛中にも発展し、明治の鉄道開通以降、京都の清酒は全国に運ばれ、その名が知られるようになった。 (京都市は、清酒での乾杯の習慣を広めることを通じて日本文化への理解を促進する「清酒の普及の促進に関する条例」を平成25年1月に制定・施行。)	
もてなしの食文化	京料理	平安貴族の「大饗料理」を元に公家の料理として発展した「有職料理」、武家の料理である「本膳料理」、禅宗の寺の食事で肉や魚を使わない「精進料理」、茶の湯の料理から発展した「懷石」、そして、京都の川沿いを中心に誕生した「川魚料理」が系譜とされ、これらが融合して、現在の「京料理」になったとされる。 味付けは出汁、献立は一汁三菜を基本とし、料理人の洗練された技術と美意識によって調理、盛り付けされた料理である。 五色(青、黄、赤、白、黒)、五味(甘味、酸味、塩味、苦味、うま味)、五法(切る、焼く、煮る、揚げる、蒸す)を五感(視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚)で愉しむ。	
	料理屋	門前の茶屋がその原型の一つとされ、江戸の中期以降に数多く誕生し、生けす(川魚)料理も提供していた。現在の料理屋では、料理だけでなく、器や「しつらえ」と併せて、「京料理」を五感で味わうことができる。	
	仕出し	店では客をとらず、客の注文に応じた料理を食事の場に届ける。年中行事の祝いごとや祭礼、法事、接待のためのもてなし文化として発展した。また、こうした仕出し料理を座敷に運び、客にサービスする配膳という仕事も生まれた。	
	しつらえ	料理と調和した漆器や陶磁器などに加え、床の間や美術工芸品といったしつらえ、さらにはそこから見える庭園も含めて、食空間を演出している。	

“京都をつなぐ無形文化遺産”

「京・花街の文化－いまも息づく伝統伎芸とおもてなし」

平成26年3月

京都市

【選定にあたって】	2
【五花街と島原の魅力＜イメージ図＞ 】	3
【五花街 ～祇園甲部，宮川町，先斗町，上七軒，祇園東～ 】	4
伝統伎芸とおもてなしの担い手「芸妓」「舞妓」	4
花街が継承する伝統伎芸	5
花街を支える「ひと」「わざ」「もの」	6
花街に伝わる伝統行事	8
花街のまちなみ	10
花街のおもてなし	11
＜各花街の紹介＞	12
【もう一つの花街 ～島原～ 】	13
（参考資料）花街の位置図，五花街のお茶屋件数・芸妓舞妓人数の推移	15

【選定にあたって】

芸妓や舞妓が舞・踊りをはじめとした数々の伝統伎芸により心のこもったおもてなしをする文化が連綿と受け継がれているまち、そして、京都の伝統文化が大切に守り続けられているまち「花街（かがい）」。京都の花街は、おもてなし文化の一大中心地として栄えてきた。

現在の京都には、祇園甲部、宮川町、先斗町、上七軒、祇園東の花街（これら五つの花街を総称して「五花街」と呼ばれている。）があり、長い歴史の中で育まれてきた京都の伝統文化の粋（すい）をもって客をもてなす文化を大切に守り続けている。また、かつて六花街の一つに数えられていた島原は、太夫文化を伝えるまちとして独自の存在感を示している。

五花街では、芸妓や舞妓が、春秋の公演を一つの目標にしながら、日々、舞・踊りをはじめとする芸事の習練を積み重ねるとともに、茶道などの伝統文化の習得に励んでいる。そして、彼女らを引き立てるきものなどの装いは、伝統工芸の職人や髪結い師、着付師など、多くの匠のわざによって支えられている。また、始業式など花街独自の行事のみならず、節分のお化けといった風習を継承するとともに、時代祭など京都の伝統行事に参加するなど、京都の伝統文化を大切に守り続けている。

そして、洗練された伝統伎芸を披露する歌舞練場をはじめ、座敷でおもてなしするお茶屋、舞妓らが生活しながら花街のしきたりを学ぶ置屋、芸妓と舞妓が芸を磨く女紅場（にょこうば）などの稽古場、そして、宴席の料理を提供する料理屋や仕出し屋などが集まり、風情あるまちなみを維持しながら、まち全体が協働して花街の文化を育んでいる。

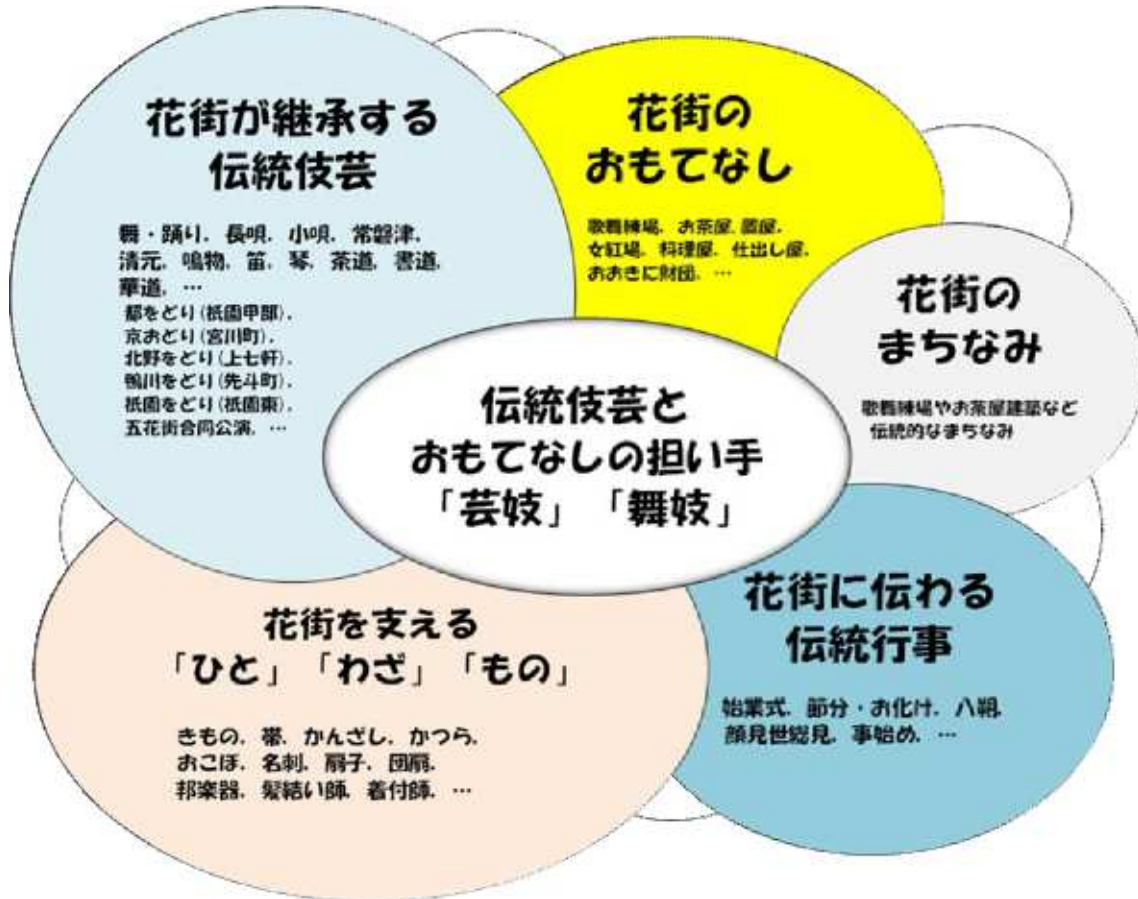
このように、京都の花街には、伝統伎芸をはじめとする伝統文化とおもてなしの文化が凝縮しており、本物へのこだわりを大切にしながら育まれたその華麗で洗練された文化は、日本国内からだけでなく、海外からも高い評価を受けている。

しかしながら、伝統伎芸とおもてなしの担い手である芸妓が年々減少し、また、その愛らしい姿が京都の花街の象徴にもなっている舞妓のなり手不足も危惧されている。さらに、お茶屋や置屋などの減少は、花街のおもてなし文化のあり様に関わる問題であると同時に、風情あふれるまちなみの維持にとって課題となっている。また、もてなされる側の伝統伎芸に対する理解不足も指摘されているところであり、伝統伎芸などの伝統文化に対する関心の低下は、花街だけでなく京都の文化全体の問題としてとらえる必要がある。

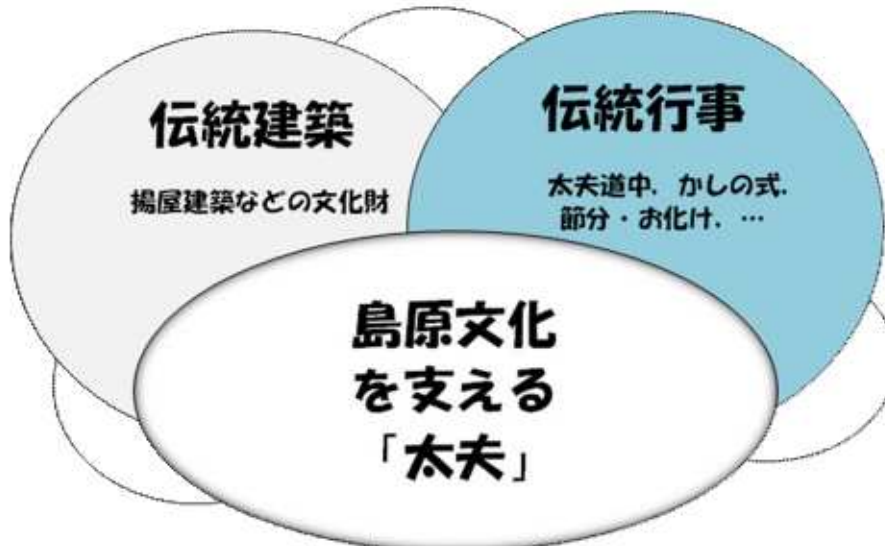
こうした現状を踏まえ、京都の文化の一翼を担ってきた花街の価値を見つめ直し、花街の文化を継承していくことの大切さを再認識するとともに、その魅力を内外に発信するため、「京・花街の文化～いまも息づく伝統伎芸とおもてなし」を、“京都をつなぐ無形文化遺産”に選定する。

【五花街と島原の魅力】

< 五花街 ～祇園甲部、宮川町、先斗町、上七軒、祇園東～ >



< もう一つの花街 ～島原～ >



【五花街 ～祇園甲部，宮川町，先斗町，上七軒，祇園東～】

項 目	内容・特徴
伝統伎芸とおもてなしの担い手 「芸妓」 「舞妓」	伝統伎芸を受け継いでいくため、芸妓や舞妓は厳しい稽古を積み重ね、座敷の客からの励ましを糧に、また、各花街の公演や五花街合同公演を一つの目標にしながら、日々、芸に磨きをかけている。 舞妓になるためには、置屋に住み込み、手伝いをしながら、舞・踊りなどの芸事や作法、京ことばなどを習得し、ある程度身に付くと、実際に座敷に出る見習い期間を経て、店出し（舞妓としてお披露目すること）し、その華やかな姿で座敷に彩りを添える。舞妓になった後も、芸事などの稽古を積み重ね、衿替え（芸妓※としてお披露目すること）する。 そして、公演や座敷で、磨き上げた芸と併せて、その艶やかな美しさと優雅で洗練された所作で客をもてなす。 <舞妓から芸妓への道筋> 仕込み → 見習い → （店出し） → 舞 妓 → （衿替え） → 芸 妓 ※ 芸妓は、舞・踊りを主にする立方（たちかた）、或いは唄や三味線、鳴物などの演奏を受け持つ地方（じかた）として、得意な芸事に更に磨きをかける。
<現状と課題> 芸事や作法の習得など、厳しい稽古の日々が続くが、伝統伎芸とおもてなしの担い手としてやりがいのある芸妓や舞妓。しかしながら、華やかな舞妓だけに憧れる女性も多く、芸妓とならずに舞妓でやめてしまうケースや、芸妓となっても、置屋から独立することによる資金面の不安などから、自前とならずにやめてしまうことも多い。京都の花街では、芸妓の減少などにより、伝統伎芸の継承者の確保が課題となっている。	

花街が 継承する 伝統伎芸	芸妓や舞妓は、一流の師匠の指導の下、稽古場※などで舞・踊り、長唄、小唄、常磐津、清元、鳴物（小鼓、大鼓、太鼓）、笛、琴などの芸事に精進するほか、茶道、書道、華道などの教養を身につける。																		
	舞踊公演は、1872 年（明治 5 年）の京都博覧会に訪れる客へのおもてなしとして開催された「都をどり」（祇園甲部）と「鴨川をどり」（先斗町）に続き、1950 年（昭和 25 年）初演の「京おどり」（宮川町）、1952 年（昭和 27 年）初演の「北野をどり」（上七軒）、同年初演の「祇園をどり」（祇園東）、と各花街で続けられている。																		
	1994 年（平成 6 年）に平安建都 1200 年を祝う催しとして開催された五花街合同公演は、京都の初夏の風物詩ともなっている。																		
	また、芸妓や舞妓の習い事の一つである茶道は、花街のおもてなしの重要な要素であり、礼儀作法の基本として、大切に受け継がれ、舞踊公演時などに設けられる茶席では、芸妓や舞妓が点前などで客をもてなしている。																		
	このように、京都の各花街においては、伝統伎芸をはじめとする伝統文化が継承されている。																		
	※ 稽古場は各花街にあり、そのうち八坂女紅場学園（祇園甲部）、東山女子学園（宮川町）は学校法人となっている。																		
	＜流派と公演＞																		
	<table><tr><th>花街名</th><th>流派</th><th>公演</th></tr><tr><td>祇園甲部</td><td>京舞井上流</td><td>都をどり、温習会</td></tr><tr><td>宮川町</td><td>若柳流</td><td>京おどり、みずゑ会</td></tr><tr><td>先斗町</td><td>尾上流</td><td>鴨川をどり、水明会</td></tr><tr><td>上七軒</td><td>花柳流</td><td>北野をどり、寿会</td></tr><tr><td>祇園東</td><td>藤間流</td><td>祇園をどり</td></tr></table>	花街名	流派	公演	祇園甲部	京舞井上流	都をどり、温習会	宮川町	若柳流	京おどり、みずゑ会	先斗町	尾上流	鴨川をどり、水明会	上七軒	花柳流	北野をどり、寿会	祇園東	藤間流	祇園をどり
花街名	流派	公演																	
祇園甲部	京舞井上流	都をどり、温習会																	
宮川町	若柳流	京おどり、みずゑ会																	
先斗町	尾上流	鴨川をどり、水明会																	
上七軒	花柳流	北野をどり、寿会																	
祇園東	藤間流	祇園をどり																	
	＜五花街合同の公演＞																		
	<table><tr><td>公益財団法人京都伝統伎芸振興財団 （おおきに財団）主催</td><td>五花街合同公演「都の賑い」</td></tr></table>	公益財団法人京都伝統伎芸振興財団 （おおきに財団）主催	五花街合同公演「都の賑い」																
公益財団法人京都伝統伎芸振興財団 （おおきに財団）主催	五花街合同公演「都の賑い」																		
	＜現状と課題＞																		
	伝統伎芸を深く楽しむためには、観る側の文化的素養も必要であるが、今日、舞・踊り、邦楽などに触れる機会が少なく、日本の伝統伎芸を鑑賞して理解できる人が減少してきている。子どもの頃から日本の伝統伎芸に触れる機会を増やすなど、すそ野を広げていく取組が求められる。																		

花街を支える 「ひと」 「わざ」 「もの」	芸妓や舞妓を引き立てる髪型やきもの、三味線や笛などの邦楽器、さらに、舞台や座敷を飾るしつらえなどには、髪結い師、着付師のほか、きものや帯、かんざしなどを作る伝統工芸の職人の「わざ」が凝縮している。職人の手から手へと受け継がれてきたこれらの「わざ」は、花街をはじめ京都の雅な文化の中で洗練され、精緻を極めてきた。 このように花街では、至るところに京都の多彩な伝統工芸を見ることができ、高い技術を誇る京都の伝統工芸が花街の文化を支えていると言える。また同時に、花街における伝統工芸に対する需要は、ものづくり都市・京都の活性化につながり、このことは日本文化の継承・発展にも寄与していると言える。 <花街を支える「ひと」「わざ」「もの」の具体例> 「きもの」 正装の黒紋付や京友禅などの季節を感じさせる装いで、花街を華やかに彩る。 「帯」 西陣織などの舞妓の「だらりの帯」は、2本の帯端が足元近くまで垂れ下がった長いもの。帯の下端には舞妓を預かる置屋の紋が入る。 舞妓は、紋付以外のきものには「ぽっちり」（普通の帯留めに比べて大きく、装飾も珊瑚や翡翠などがあしらわれ豪華）という帯留めをする。 「かんざし」 舞妓の髪を飾る精巧な細工の「かんざし」は、季節に合わせて毎月変わる。お正月や祇園祭、顔見世など行事に合わせたものもある。 「かつら」 舞妓の髪型は地毛で結うが、芸妓になると「かつら」に替わる。髪型は「島田」 「おこぼ」 舞妓だけが履く、高さ10センチほどある桐でできた履物。「こっぼり」と風情ある音を響かせ、舞妓独特のおぼこさを演出する。 「白粉（おしろい）・紅」 芸妓や舞妓の化粧は、鬢付油で下地を作り、その上に水で溶いた白粉を刷毛に付けて塗る。紅は水溶きのものを使う。 「籠」 小物を入れるのは籠。中には扇子、櫛、紅、鏡などが入っている。
--	---

	「名刺」 芸妓や舞妓が使う季節の柄などが入った木版手刷りの名刺。最近では、シール状の「千社札」が名刺代わりに使われることが多い。 「扇子」 芸妓や舞妓が帯に挟んで常に携帯する扇子のほか、舞のときに使う舞扇がある。 「団扇」 初夏の挨拶として、料理屋などのお得意先に配られ、芸妓や舞妓の名前が入った華やかな「京丸うちわ」が店先を飾る。 「邦楽器」 三味線、小鼓、大鼓、太鼓、笛など 「髪結い師」 舞妓の髪は地毛で結う。「割れしのぶ」（舞妓初期）、「おふく」（舞妓3年目位から）、「先筭（さっこう）」（衿替えの前）といった年数に応じて変わる髪型のほか、「奴島田」（正月や八朔などの正装用）、「勝山」（祇園祭の時）といった特別な髪型もある。 「着付師」 芸妓や舞妓の衣装の着付をする人。「男衆」のいる花街では男衆の仕事である。 「男衆」 着付だけでなく、店出し、衿替えなどの儀式の際に一緒に挨拶に回るほか、芸妓や舞妓の身の回りの世話をする。現在では、祇園甲部に5人程しかいない。 「化粧師」 舞踊公演時などに芸妓や舞妓の化粧を担当する人
	＜現状と課題＞ 京都の「ひと」「わざ」「もの」が花街を支えるとともに、花街における需要が、それらを支えているという側面もある。そのため、その需要の低下は京都の伝統産業にも影響を与えている。髪結い師や着付師など、花街の文化を支える後継者の不足も危惧されている。

花街に伝わる 伝統行事	花街には京都の伝統的な風習が伝わるとともに、花街独自の行事が行われ、移り変わる四季を彩っている。また、芸妓や舞妓が京都の伝統行事に参加するなど、その継承の一翼を担っている。 <五花街に伝わる伝統行事の具体例> 「始業式」 (祇園甲部、宮川町、先斗町、祇園東／1月7日、上七軒／1月9日) 新年を迎え、芸妓や舞妓が、正装の黒紋付に、縁起物である稲穂のかんざしをつけ、関係者に挨拶を交し、その年の精進を誓う。また、芸事によく精進した芸妓や舞妓、前年の成績の良いお茶屋などの表彰式も行われる。 「お化け」(節分) 節分の日、芸妓や舞妓は八坂神社や北野天満宮で舞の奉納や豆まきを行い、その夜には、仮装で笑いを誘い、福を招く。もとは厄払いのための町衆の風習が今も花街に残っている。 「八朔」(8月1日) 芸妓や舞妓が師匠やお茶屋に日頃の感謝の気持ちを伝える行事。 「八朔」とは「八月朔日(1日)」のこと。農家で古くからあった初穂を恩人などに贈る風習が武家や公家にも広まり、日頃お世話になっている人に贈り物をするようになったとされる。 「顔見世総見」(12月初旬) 南座での顔見世興行中の5日間、芸妓と舞妓が揃って観劇する。その華やかな光景は、「顔見世」のまねきとともに、京都の師走に彩りを添える。 「事始め」(12月13日) 正月の準備を始める日。お世話になった方々のもとへ鏡餅を納め、一年の御礼と新年に向けた挨拶をする。 <それぞれの花街に伝わる伝統行事の具体例> 「初寄り」(祇園甲部／1月13日) 祇園甲部の芸妓と舞妓が師匠宅に集まり、新年の挨拶をするとともに、一年間稽古に励むことを誓う。 「かにかくに祭」(祇園甲部／11月8日) 祇園を愛した大正・昭和期の歌人・吉井勇を偲ぶ行事
------------------------	--

	「おことうさん・おけら火」(祇園甲部, 宮川町, 祇園東／大晦日) 芸妓と舞妓がお茶屋に「おことうさんどす」と年末の挨拶にまわる。お茶屋は舞妓に小物が入った福玉を渡す。夜には八坂神社に詣で、おけら火をもらう。 昔はたくさんの福玉を持ち歩く舞妓の姿が見られたが、現在は、京都以外の出身者が多くなり、郷里に帰る舞妓が増え、あまり見られなくなっている。 <花街が参加する伝統行事の具体例> 「梅花祭」(上七軒／2月25日) 北野天満宮の祭神である菅原道真公の命日に行われる祭典。北野天満宮境内にて、上七軒の芸妓と舞妓による野点茶会が行われる。 「平安神宮例大祭奉納舞踊」 (祇園甲部, 宮川町, 先斗町, 祇園東／4月16日) 平安神宮の春の例大祭。16日に舞の奉納が行われる。 「観亀神社宵宮祭」(祇園東／5月中旬) 観亀稲荷神社の宵宮祭に祇園東の芸妓や舞妓が参加する。 「祇園祭・花傘巡行」(祇園甲部, 宮川町, 先斗町, 祇園東／祇園祭) 八坂神社の氏子として、7月24日の「花傘巡行」に参加するなど、祭を盛りたてる。 「時代祭」(10月22日) 時代風俗行列に各花街が交代で参加し、小野小町や清少納言、巴御前などの役を担う。 「献茶祭」(上七軒／12月1日) 1587年に豊臣秀吉が催した「北野大茶会」にちなんで北野天満宮で行われる大茶会。その副席の一つが上七軒歌舞練場に設けられる。
	<現状と課題> 花街の伝統行事には、花街独特のものもあるが、京都の古い伝統を受け継いでいるものもあり、京都の伝統文化の継承に花街が担っている役割は大きい。京都のまちを彩る風物詩を大切に引き継いでいく必要がある。

花街の まちなみ	古くは 100 年以上の歴史のある歌舞練場をはじめ、お茶屋や置屋、女紅場といった稽古場など、これら花街を構成する伝統的な建築物群は、京都を代表する歴史的景観として、風情あふれるまちなみを形成している。 市街地景観整備条例の制定などの京都市の取組のほか、各花街の地域におけるまちづくり委員会等の設置※など、まちなみ保全に向けた自主的な取組が進められている。 ※ 1996 年（平成 8 年）に「祇園町南側地区協議会」、2003 年（平成 15 年）に「上七軒まちづくり委員会」、2009 年（平成 21 年）に「先斗町まちづくり協議会」（「先斗町の将来を考える集い」を改名）が発足している。 （参考） <歌舞練場> 祇園甲部歌舞練場，宮川町歌舞練場，先斗町歌舞練場， 上七軒歌舞練場，祇園会館 <文化財指定等の状況> ・国登録有形文化財 祇園甲部歌舞練場（本館，別館，玄関，正門） ・歴史的風致形成建造物 祇園甲部歌舞練場，上七軒歌舞練場 ・京都を彩る建物や庭園（認定） 先斗町歌舞練場 ・地区指定による景観保全 祇園新橋伝統的建造物群保存地区（祇園甲部） 祇園町南歴史的景観保全修景地区（祇園甲部，宮川町） 上京北野界わい景観整備地区（上七軒）
	<現状と課題> お茶屋などの伝統的建築物が少なくなっており、まちなみとして残っている花街の歴史的景観を保存していく上で課題となっている。また、歌舞練場の老朽化など、伝統的建築物の維持が、花街にとって大きな負担となっている。

花街のおもてなし	花街のおもてなしは、芸妓や舞妓の芸やお座敷遊び※1など、客も参加しながら宴席を和ませる独特の文化である。 芸妓や舞妓，料理などの手配，座敷のしつらえなど，お客の好みや利用目的に応じたおもてなしを提供するお茶屋※2，舞妓らを住ませ，芸事やしきたりを教えるとともに，要請に応じてお茶屋などに派遣する置屋，そして，宴席の料理を提供する料理屋や仕出し屋など，それらが協働して花街のおもてなし文化を支えている。 芸妓や舞妓が女紅場などの稽古場で芸を磨くなど，五花街が互いに競い合い，花街全体がおもてなし文化の向上に努めている。また，公益財団法人京都伝統伎芸振興財団（おおきに財団）も花街の伝統伎芸の保存・継承に大きな役割を果たしている。 お茶屋の一見さんお断りといった慣行も，お客のことをよく知ること，より高いレベルのおもてなしを提供するためであり，おもてなしを受ける側も，花街の文化を支える一員として，お茶屋との信頼関係を築き，さらに，より深く芸を楽しむため，伝統伎芸に対する見識を深めることも求められる。 ※1 お座敷遊びとしては，「とらとら」などのジャンケン，三味線を使う「金毘羅船々」，扇子を使う「投扇興」などがある。 ※2 花街では，座敷でのおもてなしの場は本来お茶屋であるが，最近では料理屋やホテルに芸妓や舞妓を招いて行われる宴席も多くなっている。
	<現状と課題> 様々な人によって支えられ，受け継がれている花街の文化にとって，芸妓や舞妓を育てる置屋やお茶屋の減少は，花街の仕組みそのものを揺るがしかねない問題である。また，おもてなしを受ける客も，花街の文化を支える一員であるが，芸を理解し，芸の目利き役として芸妓や舞妓の成長を見守ることができる客が最近では少なくなっている。

＜各花街の紹介＞

現在、京都花街組合連合会に加盟している花街として、祇園甲部、宮川町、先斗町、上七軒、祇園東の5つの花街があり、総称して五花街と呼んでいる。

花街名	概 要
祇園甲部 	四条通を挟んで北は新橋通、南は建仁寺通、西は大和大路通、東は東大路通に囲まれた花街。八坂神社の門前町として栄え、現在でも江戸時代の茶屋建築の面影を残す風情あるまちなみが独特の情緒を形作っている。 祇園甲部歌舞練場において、春に「都をどり」、秋には「温習会」の公演を行う。京舞井上流
宮川町 	鴨川の東側、四条通の南側から五条通までの花街。八坂神社の御輿洗いが行われていたことから宮川という名がついた。江戸時代には出雲阿国の歌舞伎公演が行われ、芝居町や茶屋町として発展し現在に至る。 宮川町歌舞練場において、春に「京おどり」、秋に「みずゑ会」の公演を行う。若柳流
先斗町 	鴨川と木屋町の間、三条から四条に至る通りの花街。その名の由来には、ポルトガル語のポント（「先」の意味）など諸説ある。先斗町歌舞練場は三条大橋近くにあり、鴨川からその存在感ある佇まいを眺めることができる。 先斗町歌舞練場において、春に「鴨川をどり」、秋に「水明会」の公演を行う。尾上流
上七軒 	北野天満宮の東、千本釈迦堂の西にある花街。室町時代に、北野天満宮の造営に使った残木で七軒の茶屋を作り、参拝客の休憩所とした。その七軒茶屋に豊臣秀吉が茶屋株を公許したのがお茶屋の始まりとも伝えられる。 上七軒歌舞練場において、春に「北野をどり」、秋に「寿会」の公演を行う。花柳流
祇園東 	祇園甲部と同じく八坂神社の門前町として江戸時代から栄えてきた花街。1881年（明治14年）に、四条花見小路北東部（四条通り以北、花見小路以東）が祇園東に区分され現在に至る。 歌舞練場である祇園会館において、秋に「祇園をどり」の公演を行う。藤間流

【もう一つの花街 ～島原～ 】

内容・特徴
当初は二条柳馬場に開かれ、その後六条三筋町に移転し、さらに 1641 年に現在の地に移された。急な移転騒動が、当時の島原の乱に似ていたことから、島原と呼ばれたとも言われている。 遊宴だけでなく、和歌や俳諧などの文芸活動が盛んで、江戸中期には島原俳壇が形成されるほどの活況を呈した。1873 年（明治 6 年）に開設された歌舞練場において「青柳踊」や「温習会」が上演され、京都の六花街の一つに数えられていた。また、太夫道中※1や「かしの式」※2などの独自の文化を今も継承している。 島原には、揚屋※3と置屋があり、揚屋は太夫や芸妓などをかかえず、置屋から太夫等呼んで宴会を催していた。 揚屋であった角屋の建物は、揚屋建築唯一の遺構として、1952 年（昭和 27 年）、国の重要文化財に指定。また、置屋の輪違屋は京都市指定文化財、東の玄関であった島原大門は京都市登録文化財である。その大門から続く島原の道が石畳風に整備され、歌や俳句を記した文芸碑とともに、まちの風情を醸し出している。 ※1 「太夫」とは、傾城（けいせい 官許により宴席で歌舞音曲をもって接待する女性）の最高位。客層に公家が多かったため、歌舞音曲、茶道、華道のほか、和歌、俳諧、さらには、囲碁や双六などにも長けていた。 「太夫道中」とは、着飾った太夫が、禿（かむろ）、引船（ひきぶね）などの多くの付人を連れて、差しかけ傘で内八文字を踏みながら置屋から揚屋へ練り歩くこと。 ※2 太夫を置屋から呼び、客に紹介する式。太夫が盛装を凝らして盃台の前に座り、盃を回すしぐさを見せている傍らで、仲居が太夫の名前を呼んで客に紹介する。 ※3 現在の料理屋にあたり、二階へ客を揚げることから「揚屋」と呼ぶようになった。江戸中期以降、「揚屋」は、大座敷とそれに面した広庭、茶室、寺院の庫裏と同規模の台所を備える大宴会場へと発展し、明治以降、お茶屋業に編入された。

＜島原の太夫が参加する伝統行事の具体例＞

「宝鏡寺ひなまつり」（3月1日）

宝鏡寺で行われるひなまつりにおいて、太夫の奉納舞が披露される。

「吉野太夫花供養」（4月第2日曜日）

島原の名妓であった吉野太夫の墓がある常照寺で行われる。近くの源光庵から常照寺本堂まで太夫道中が行われる。

「夕霧供養」（11月第2日曜日）

島原から大阪の名妓となった夕霧太夫の墓がある清涼寺で行われる。本堂前から三門まで太夫道中が行われる。

＜現状と課題＞

島原は、1976年（昭和51年）、京都花街組合連合会を脱会した。置屋である輪違屋が1872年（明治5年）からお茶屋を兼業しており、現在島原でお茶屋営業を行っているのは輪違屋のみである。

太夫も数人となり、太夫文化の継承が課題となっている。

(参考資料)

花街の位置図



五花街のお茶屋件数・芸妓舞妓人数の推移 (各年1月末現在)

